

# 三日市 A 遺跡 3

2012

石川県野々市市教育委員会

# 三日市 A 遺跡 3

2012

石川県野々市市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、三日市A遺跡(第2・8・19次)の埋藏文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県野々市市三日市町地内である。
- 3 調査原因は野々市市北西部土地区画整理事業に伴うものである。
- 4 調査は、野々市市北西部土地区画整理組合の依頼を受けて野々市市教育委員会が行った。
- 5 現地調査は平成13・15・17年度に実施した。面積・期間・担当者は以下のとおりである。

平成13年度調査(第2次)	期 間	平成13年10月15日～平成13年12月25日
	面 積	2,200㎡
	担 当 者	徳野裕子 野々市町教育委員会文化課 主事
平成15年度調査(第8次)	期 間	平成15年4月7日～平成15年10月7日
	面 積	3,300㎡
	担 当 者	徳野裕子 野々市町教育委員会文化課 主事
平成17年度調査(第19次)	期 間	平成17年7月6日～平成17年11月23日
	面 積	2,506㎡
	担 当 者	横山貴広 野々市町教育委員会文化振興課 専門員
- 6 出土遺物の整理は平成15年度、平成16年度、平成21年度に野々市町教育委員会が行った。
- 7 報告書の刊行は平成23年度に野々市市教育委員会文化振興課が実施した。担当分担任は以下のとおりである。

第1章 第2章 第3章 第4章	徳野裕子
第5章	横山貴広
- 8 現地調査、本書の執筆にあたっては、野々市市北西部土地区画整理組合、柿田祐司の協力を得た。(敬称略)
- 9 本書についての凡例は以下のとおりである。
  - (1) 方位は座標北と指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。
  - (2) 水平基準は海拔高であり、(m)で表示する。
  - (3) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
  - (4) 出土遺物番号は、本文・観察表・写真に対応する。
  - (5) 上層図の注記の一部は、農林水産省農林水産技術会事務局・財団法人日本色彩研究所監修「新版標準土色帖」に拠った。
  - (6) 遺構名の略号は以下のとおりである。  
掘立柱建物(SB)、竪穴建物・竪穴状遺構(SI)、溝(SD)、土坑(SK)、小穴(P)、不明遺構(SX)
- 10 調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括で保存・管理している。
- 11 例言・本文中に記載されている野々市町の名称は2011年11月11日の市制施行に伴い現在は野々市市となっている。

# 目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 第2次調査	4
第1節 発掘・整理作業の経過	4
第2節 調査の方法	4
第3節 遺構	4
第4節 遺物	9
第5節 小結	9
第4章 第8次調査	11
第1節 発掘・整理作業の経過	11
第2節 調査の方法	11
第3節 遺構	14
第4節 遺物	24
第5節 小結	26
第5章 第19次調査	33
第1節 発掘・整理作業の経過	33
第2節 調査の方法	33
第3節 遺構	33
第4節 遺物	33
第5節 小結	33

## 挿図目次

第1図 三日月市A遺跡調査区図	1	第19図 出土遺物実測図4	30
第2図 野々市市位階図	2	第20図 SB01平面図・断面図	34
第3図 周辺の遺跡	3	第21図 SB03平面図・断面図	35
第4図 三日月市A遺跡(第2次)遺構平面図	5	第22図 SB04平面図・断面図	36
第5図 SB01・SB02遺構図・断面図	7	第23図 SP07平面図・断面図	37
第6図 SK・SD・P・SX遺構図・土層断面図	8	第24図 SB08平面図・断面図	38
第7図 出土遺物実測図1	10	第25図 SB09平面図	39
第8図 三日月市A遺跡(第8次)遺構平面図	12・13	第26図 SB09西辺断面図	40
第9図 B区SK01遺構図・土層断面図	15	第27図 SB09東辺ほか断面図	41
第10図 CKSH02遺構図・土層断面図	16	第28図 SB11平面図・断面図	42
第11図 AKSSH01遺構図・断面図	17	第29図 SB12平面図・断面図	43
第12図 AESSB02・SD遺構図・土層断面図	19	第30図 SK01~05・09平面図・断面図	44
第13図 AESSB03遺構図・土層断面図	20	第31図 SX01~03平面図・断面図	45
第14図 A・CKSH03~05遺構図・土層断面図	21	第32図 遺構全体図	47・48
第15図 A・CKSK遺構図・土層断面図	22	第33図 出土遺物実測図1	52
第16図 出土遺物実測図1	27	第34図 出土遺物実測図2	53
第17図 出土遺物実測図2	28	第35図 出土遺物実測図3	54
第18図 出土遺物実測図3	29	第36図 出土遺物実測図4	55

## 表目次

第1表 野々市市の遺跡	3	第4表 掘立柱建物一覧表2	50
第2表 出土遺物観察表1	9	第5表 掘立柱建物一覧表-柱間寸法1	50
第3表 出土遺物観察表2	31	掘立柱建物一覧表-柱間寸法2	51
第4表 掘立柱建物一覧表1	32	第6表 出土遺物観察表1	56
	49	出土遺物観察表2	57

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

本書に収録の三日市A遺跡は野々市市三日市町・二日市町内に位置する。当該地周辺は農地としての土地利用が主であり、開発を契機とする発掘調査はほとんど行われていなかったため、遺跡の分布の実態は不明瞭であった。しかし、近年の周辺の都市化に伴い、生活環境と宅地化の促進を目的とした野々市町北西部土地区画整理事業が施行されることが決定した。これを受けて施行区域内には埋蔵文化財存在の可能性が考えられることから、確認調査の必要が生じ、平成11年8月25日付けで野々市町産業建設部長から野々市町教育委員会教育長宛に土地区画整理事業区域内の埋蔵文化財の分布調査の依頼がなされ、平成11年8月31日付けで野々市町教育委員会教育長から野々市町産業建設部長宛に土地区画整理事業区域内の埋蔵文化財分布調査を行う旨の回答をした。これに基づき、施行区域65.4ha内に試掘坑を352箇所(うち337箇所試掘実施)設定し、平成11年9月27日～同年10月19日まで試掘調査を行った。その結果、以前より存在の確認されていた二日市イシバチ遺跡、新たに三日市A遺跡、三日市ヒガシタンボ遺跡、郷クボタ遺跡、徳用クヤダ遺跡が確認され、区画整理施行区域内には5遺跡が存在することがわかった。

本報告の発掘調査は県道二日市・徳用線築造に伴い行われた発掘調査で、築造予定地のほとんどが埋蔵文化財包蔵地範囲内であったことから、数カ年に渡り発掘調査を行っている。三日市A遺跡については第2次：平成13年度、第8次：平成15年度、第19次：平成17年度に発掘調査を実施している。



第1図 三日市A遺跡調査区図(1/5,000)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

野々市市は石川県のほぼ中央に位置する。山海のない平坦地で、北東部は金沢市、西南部は白山市とそれぞれ接している。南北6.7km、東西4.5km、面積13.56km<sup>2</sup>の市域を有する。市域は霊峰白山を源とする泉下第一級河川手取川によって形成された手取川扇状地の北東部にあたり、扇中部と扇端部の狭間に位置する。現在の野々市市は近世から明治大正期にいたる耕地整理開発により平坦な地形であるが、以前は微高地と微低地が混在する凹凸の多い地形であった。これは手取川から派生する多くの小河川が洪水や氾濫を繰り返すことによって島状地形がくり出されたからである。野々市市の遺跡の多くはその微高地上に所在する。

本書で取り上げる三日市A遺跡は野々市市北西部に広がる広大な遺跡である。遺跡周辺は以前までは田園が広がる風景であったが現在では区画整理が進み、今まで広がっていた風景は大きく変貌を遂げている。



第2図 野々市市位置図

### 第2節 歴史的環境

三日市A遺跡の所在する手取川扇状地扇端部は縄文時代から中近世までの遺跡が数多く存在する地域である。ここでは三日市A遺跡周辺の遺跡を概観する。

縄文時代を代表する遺跡は国指定史跡の3御経塚遺跡が挙げられる。この遺跡は縄文時代後・晩期の大集落跡で、竪穴建物や環状木柱列、多彩な土器・石製品などが出土している。

弥生時代は農耕文化が定着する時代であるが、野々市市周辺では後期になってようやく各地で集落が増加してくる。7二日市イシバチ遺跡をはじめとして、3御経塚遺跡、10三日市A遺跡などがある。

古墳時代に入ると再び遺跡数は激減する。1御経塚シンデン古墳や二日市イシバチ遺跡で前期古墳が確認されているのみで、集落についてもこの2遺跡のほかに上新庄ニシウラ遺跡程度しかなく、弥生時代後期とは比較しようがない少なさである。

奈良・平安時代には、手取川扇状地扇中部で政治勢力を背景とした39末松麿寺が7世紀に建立され、それに伴い、30三納アラミヤ遺跡・33粟田遺跡などの大規模な集落跡が急増する。

中世に入ると、手取川扇状地の更なる開発に乗り出す在地武士の林氏と富樫氏が台頭してくる。林氏は野々市市南部から白山市鶴来地区にかけて、富樫氏は野々市市東部の高橋川流域からその北方にあたる伏見川流域一帯にかけて地盤を築いていった。林氏が活躍する鎌倉時代に高橋川を天然の要害とした武士の居館跡である24扇が丘ハワイゴク遺跡が扇が丘地内に出現する。

承久の乱(1221)以降、林氏の勢力は衰え、富樫氏が台頭してくる。富樫高家は加賀国の守護職に任ぜられ、守護所(22富樫館跡)を野々市市に構えた。館の周囲では市場などの都市的機能をもった場や、墓地やその関連施設など信仰の場があったことが分かっている。当該時期の集落遺跡は、10三日市A遺跡・12徳用クヤダ遺跡・32三納ニシヨサ遺跡などで確認されている。

#### 参考文献

- |              |      |              |
|--------------|------|--------------|
| 『野々市町史 資料編1』 | 2003 | 野々市町史編纂専門委員会 |
| 『野々市町史 集落編』  | 2004 | 野々市町史編纂専門委員会 |
| 『図説 野々市町の歴史』 | 2005 | 野々市町史編纂専門委員会 |



第3図 周辺の遺跡(1/20,000)

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	御経塚シンデン遺跡	弥生 古墳 中世 近世	28	三林野跡	中世
2	御経塚シンデン古墳跡	弥生 古墳 中世 近世	29	三納トヘイダゴシ遺跡	中世
3	御経塚遺跡	縄文 弥生 古代 中世 近世	30	三納アラミヤ遺跡	弥生 中世
4	御経塚オツツ遺跡	弥生 中世	31	藤平田ナカシギツ遺跡	中世
5	長池ニシタンボ遺跡	縄文 弥生 古墳 中世 近世	32	三納ニシヨサ遺跡	中世
6	長池キタノハシ遺跡	弥生 中世 近世	33	扇田遺跡	縄文 古代 近世
7	二日市インバチ遺跡	弥生 弥生 中世 近世	34	清合アガトク遺跡	縄文 古代 中世
8	野代遺跡	縄文	35	東松信彌跡	古代 中世
9	三日市ヒガシタンボ遺跡	古代 中世	36	末松福正寺遺跡 福正寺跡	古代
10	三日市A遺跡	弥生 古代 中世	37	末松ダイカン遺跡	古代
11	響クボタ遺跡	古代 中世	38	末松B遺跡	古代
12	徳用クヤダ遺跡	古代 中世	39	末松徳寺跡	弥生 古代 中世 近世
13	上宮寺跡	中世	40	古元堂跡	不詳
14	押野大塚遺跡	縄文 弥生	41	末松C遺跡	古代
15	押野タナカ遺跡 押野館跡	縄文 弥生 中世	42	末松古墳	古墳
16	押野ウマワタリ遺跡	弥生 中世	43	末松A遺跡	縄文 古代 中世
17	横川本町遺跡	弥生 中世	44	大籠館跡	古代 中世
18	高橋セボネ遺跡	弥生 中世	45	東松野跡	不詳
19	山川館跡	縄文 中世	46	法福寺跡	不詳
20	高橋ウバガタ遺跡	弥生	47	末松しりわん遺跡	古代 近世
21	扇が丘ゴシヨ遺跡	弥生 古代 中世	48	下新庄アラチ遺跡	古代
22	常盤館跡	縄文 中世 近世	49	下新庄タナカダ遺跡	古代
23	扇が丘ヤダダ遺跡	古代 中世	50	上新庄遺跡	古代
24	扇が丘ハエイゴク遺跡	縄文 弥生 古代 中世	51	上林古墳	古墳
25	菅原キツネヤヅ遺跡	中世 近世	52	上林ナラダ遺跡	古代
26	扇内館跡	縄文 中世 近世	53	上林ニシウラ遺跡	弥生 古墳 古代
27	田中ノダ遺跡	弥生 古墳	54	上林遺跡	弥生 古代
			55	安養寺遺跡	弥生 古代

第1表 野々市市の遺跡(上図での位置の掲載は№23まで)

## 第3章 第2次調査

### 第1節 発掘・整理作業の経過

当初の計画では県道二日市・松任線築造予定部分である2,100㎡の埋蔵文化財発掘調査を実施する予定で、平成13年5月7日付で野々市町西北部土地区画整理組合と委託契約を取り交わしていたが、工事計画に変更が生じ、当初調査予定箇所より300m程はなれた県道二日市・徳用線築造部分の一部である2,200㎡の埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。平成13年9月10日付で調査地変更となる変更委託契約を取り交わし、発掘調査承諾書は平成13年9月11日に土地区画整理組合から提出された。文化財保護法58条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は平成13年10月5日付教文第188号で野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会へ報告した。

現地での作業は平成13年10月15日より開始した。最初は大型重機による遺構面までの掘削より開始し、10月24日に掘削を完了した。掘削と並行して10月23日より作業員による人力作業を開始し、外部委託によるグリッド測量も同時に行っている。A区については、遺構は溝やピットなど多数確認できたが、遺物は少量にとどまった。B区では掘立柱建物2棟を確認したが、C・D区では遺構は希薄になり、遺物もほとんど出土しなかった。調査は排水作業に時間を取られることが多かったが12月21日に空中写真測量を実施し、同日のうちに終了した。同月25日には調査機材等の洗浄、搬出作業を終えて現地調査を終了した。

出土遺物整理作業は平成15年度に実施した。遺物の整理作業は臨時職員が4名担当し、遺物の実測図作成及び遺物実測図トレース作業を5月に行った。

報告書の執筆刊行作業は平成23年12月より開始し、原稿執筆、図版作成、遺物写真撮影、報告書編集を行い、平成24年3月に刊行した。

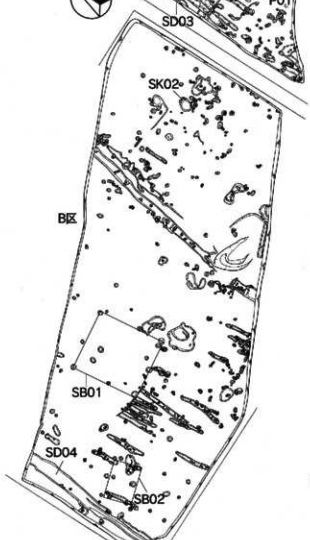
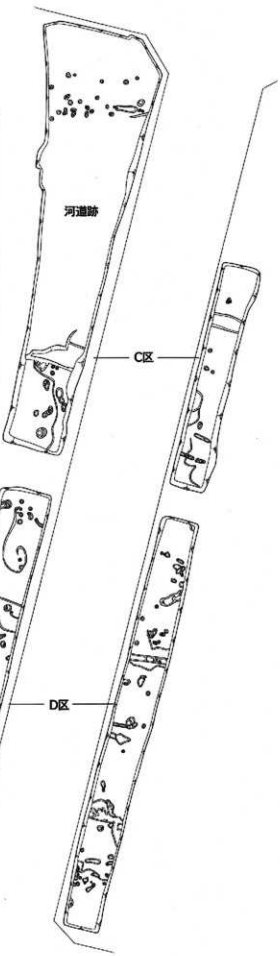
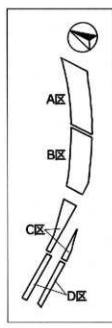
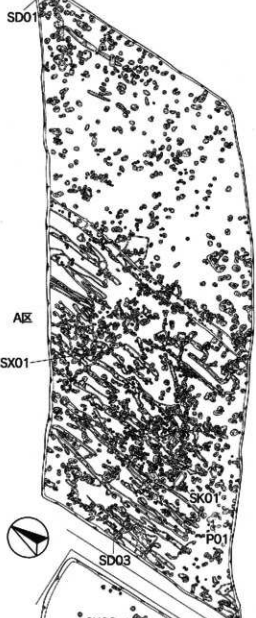
### 第2節 調査の方法

調査の実施にあたっては公共座標を基準とした10m×10mのグリッド杭の設定を外部委託により行った。アルファベットと算用数字を用いてグリッド割を行っている。グリッド杭設定後本格的な調査を開始している。作業の内容は人力による遺構の検出・掘削や各遺構の記録の図示、写真撮影などである。調査では掘立柱建物、土坑、溝などの遺構を検出した。遺構の土層断面や遺物の出土状況の写真撮影は白黒フィルム、カラーリバーサルフィルムを使用し撮影を行っている。土層断面の記録作業はスケール1/20で記録を行い、遺構番号は出土した遺物の取り上げと同時に番号を付す方法を取った。遺構完掘後は調査区内の清掃等を行い、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影と測量を実施し現地での作業を終了した。

### 第3節 遺構

第2次調査では古代を主体とした遺構を確認している。縄文時代では明確な遺構は確認できていないが、A区SX01から縄文土器の口縁～体部が出土している。古代の遺構はA区・B区で確認され、掘立柱建物、畝溝、溝、ピットを確認している。C区では河道跡を確認したが、遺物も確認されず、粘性が強いことから、トレンチのみの掘削で地山面を確認するだけに留めた。河道跡より西側にあたるD・E・F区は遺構が確認されたA・B区よりも地山面が10～70cm低く、土の粘性が強く遺構も希薄となっている。





第4図 三日市A遺跡(第2次)遺構平面図(S=1/300)

## 古代の遺構

### SB01 (第5図)

B区西で確認した軸N-14°Wに向きをとる建物である。2間×2間の側柱建物で、桁行5.35m×梁行4.88m、床面積26.1㎡の南北棟である。柱穴の形は円形に近く、直径30～51cmで、深さは18～50cmであった。P4はP1-P6のライン上から大きくずれる。何れの柱穴からも遺物は出土していない。

### SB02 (第5図)

B区SB01の南西で確認された軸N-20°Wの建物である。1間×2間の側柱建物で桁行3.05m×梁行2.05mの東西棟で床面積6.25㎡である。柱穴の形はP4が若干歪であったがほとんど円形で、直径25cm～55cm、深さは9cm～39cmであった。何れの柱穴からも遺物は出土していない。SB01、02共に遺物は出土していないが、周辺における遺物の出土状況から見て古代の遺構であると判断した。

### SK01 (第6図)

A区南西で確認した楕円形の土坑である。東西ラインが長辺で、1.8m、短辺0.55m、深さは27cmであった。土師器の小片が数点出土している。

### SK02 (第6図)

B区東で確認された土坑である。形は楕円形で長径が1.04mで短径が0.88m、深さは最深部で39cmであった。遺物は須恵器環(3)が1点出土している。

### P01 (第6図)

A区南西の南壁付近で確認した。東側に別のピットと切り合っており、形は歪な楕円形であったと考えられる。長辺は0.65m、短辺は0.45mで深さは最も深いところで41cmであった。内部からは須恵器の横瓶(5)が出土している。

### P02 (第6図)

B区北東部分で確認した。形状は円形で径40cm、深さ54cmであった。須恵器の環(4)が出土している。

### SD01 (第6図)

A区北東隅での確認のためほとんどが調査区外となる。確認できたところで幅50～70cm、深さは50cmであった。土師器、須恵器それぞれ1点出土している。

### SD02 (第6図)

A区中央付近を南北に走る溝である。幅70～80cm、深さは9cm～26cmで、A区内の畝溝と並行して走る。このSD02を境にして東側では畝溝は見られなくなる。遺物は出土していない。

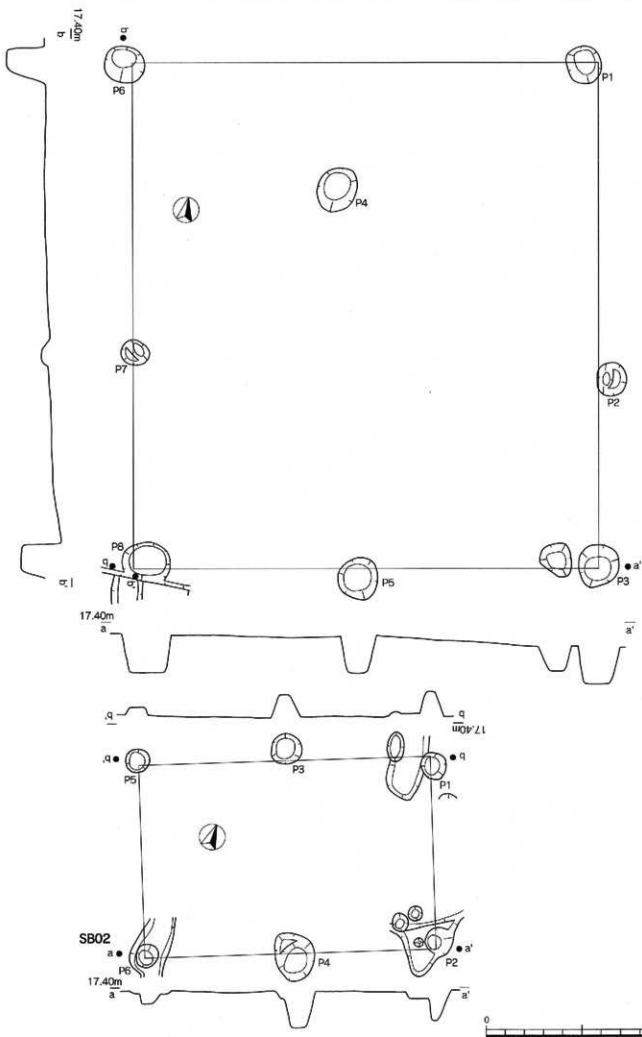
### SX01 (第6図)

A区中央付近の畝溝群の中で確認した。形は壺で内部からは縄文土器(1)が出土している。周辺に縄文時代の遺構が確認できず、確証がないことから当該期の遺構として抽出した。

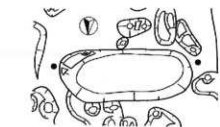
## 古代以降の遺構

### SD03・SD04 (SD04・第6図)

SD03はA区西端に南北に走る溝である。灰色をベースとした覆土からは近世の陶磁器が出土している。B区西端のSD04も近世の遺物が出土しており何れも近世の溝であると考ええる。

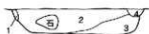


第5圖 SB01・SB02遺構圖・断面図(S=1/40)



SK01

17.30m

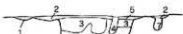


1. 褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土
3. 黄褐色粘質土
4. 灰黄色粘質土

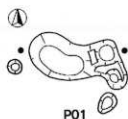


SK02

17.40m



1. 灰色粘質土(黄色ブロック跡)
2. 灰褐色粘質土(黄色ブロック跡)
3. 灰色粘質土(黄色・褐色ブロック跡)
4. 黄褐色粘質土(白灰色)
5. 灰色粘質土(黄色ブロック少量・褐色ブロック跡)
6. 灰色粘質土(黄色・褐色ブロック跡)
7. 灰黄色粘質土

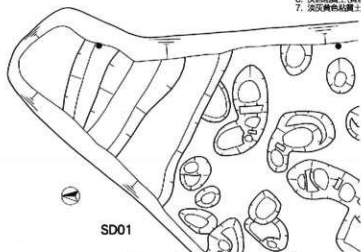


P01

17.30m



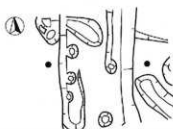
1. 黒褐色粘質土(黄色ブロック跡)
2. 褐色粘質土( # )
3. 灰褐色粘質土(黄色をベースに褐色が混、黄色ブロック跡)
4. 黄褐色粘質土
5. 灰褐色粘質土
6. 褐色粘質土(黄色ブロック少し跡)
7. 灰褐色粘質土(3より黄色ベースが多い、黄色ブロック跡)



SD01



1. 表土
2. 褐色灰色粘質土(灰土)
3. 灰褐色粘質土
4. 褐色灰色粘質土(黄色ブロック跡)
5. 灰褐色粘質土
6. 褐色褐色粘質土
7. 褐色粘質土
8. 灰褐色粘質土
9. 灰褐色粘質土
10. 灰褐色粘質土
11. 褐色灰色粘質土
12. 褐色粘質土
13. 褐色灰色粘質土
14. 褐色灰色粘質土
15. 褐色灰色粘質土(黄色ブロック跡)
16. 褐色粘質土
17. 褐色粘質土
18. 褐色粘質土
19. 灰黄色粘質土

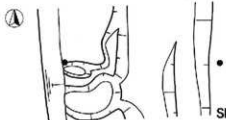


SD02

17.30m



1. 黒褐色粘質土
2. 褐色黄色粘質土(黒褐色ブロック混じり)

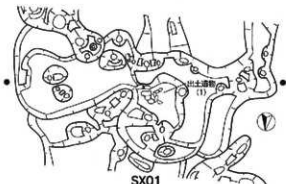


SD04

17.50m

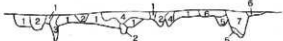


1. 灰褐色粘質土
2. 灰色粘質土
3. 灰褐色粘質土



SX01

17.30m



1. 褐色灰色粘質土(黄色ブロック跡)
2. 褐色粘質土( # , 灰化地)
3. 灰褐色粘質土
4. 褐色灰色粘質土(黄色ブロック、灰化地)
5. 褐色粘質土
6. 褐色粘質土(黄色ブロック跡)
7. 褐色灰色粘質土(黄色ブロック跡)



第6図 SK・SD・P・SX遺構図・土層断面図(S=1/40)

## 第4節 遺物

本調査では縄文時代、古代、近世の遺物が確認されたが、総体的に遺物の量は少ない。これらの中で遺構から出土したものや、特出すべき形態のものを中心に15点選定し、実測図を掲載した(第7図)。

縄文時代については土器片が数点出土しており、掲載点数は1点である。

古代は本調査では実測掲載できないものがほとんどであったが出土点数が一番多く、須恵器、土師器が出土している。

近世では、溝から出土しているものが大半である。以下、主要な遺構からの出土資料や特徴的な土器などを掲載した。

1はSX01から出土した縄文土器である。口縁～体部までのもので、底部の出土はなかった。外面には斜め方向の条痕が施されている。2は縄文土器の底部で外面には網代痕が確認できる。縄文土器については、実測には至っていないが他の遺構からも数点であるが出土している。3・4は須恵器の坏である。4は底部が厚く立ち上がりか緩やかである。5は須恵器の横瓶である。焼成が不良のため体部が窪んでおり、焼成時に付着した他の須恵器が窪んだ箇所に残っている。

6～15は近世の陶磁器である。碗や皿、鉢など生活雑器が多く、ほとんどがSD03・04からの出土である。

## 第5節 小 結

今回の発掘調査では縄文時代、古代、近世の遺構・遺物を確認することができた。

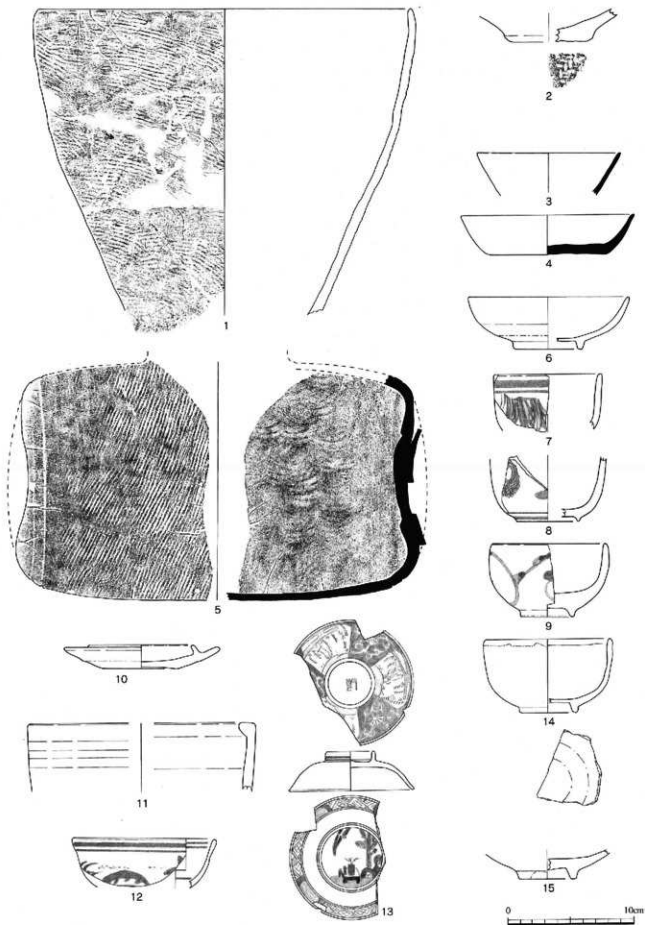
縄文時代では、遺構から遺物の出土が見られたが、当該期の遺構とは決定付けるに至らなかった。今回の調査だけでなく周辺の調査でも縄文期の遺物が確認されていることから、今回のものも食料採取などの一時的な生活拠点地と考えたい。

古代では掘立柱建物2棟と耕作地、溝を確認した。調査地の西へ向かうと地山面は低くなり遺構は希薄になっていく。耕作地については東西15m、南北15mに渡って確認し、更に北側に耕作域は広がる。散溝からの遺物の出土はごく少量で時期を決定付ける状態のいい遺物は出土しなかった。掘立柱建物については2間×2間と1間×2間の2棟のみの検出であった。柱穴からの遺物の出土はなく、耕作地同様、遺構の時期を決定するには出土遺物の点数が乏しいが、周辺の遺構から出土の遺物や周辺調査の古代遺構の時期から考えて8世紀中ごろ～後半の集落の一部、耕作地であると考えられる。

近世では南北方向の溝を2条検出している。農業用の用水として使用していたものである。

第2表 出土遺物観察表

調査 番号	遺物 番号	種類	形状	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	色調(内)		備考	備考	
							表面	底面			
1	ASB SD01	土器片	口縁部	20.4			土色・黄褐色	土色・黄褐色	1/4	須恵器(赤土) 網代痕(縦方向)	19123
2	DSZ SD02	土器片	底面			17.0	土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	網代痕(縦方向)	19129
3	DSZ SD03	土器片	底面	11.4			土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	網代痕(縦方向)	19125
4	ASB SD04	土器片	底面	12.8	8.5	9.6	土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	須恵器(赤土) 網代痕(縦方向)	19126
5	ASB SD05	土器片	底面				土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	須恵器(赤土) 網代痕(縦方向)	19124
6	ASB SD06	土器片	底面	12.7	4.1	5.6	土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	須恵器(赤土) 網代痕(縦方向)	19127
7	ASB SD07	土器片	底面	8.6			土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	須恵器(赤土) 網代痕(縦方向)	19128
8	ASB SD08	土器片	底面		8.0	8.0	土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	須恵器(赤土) 網代痕(縦方向)	19121
9	ASB SD09	土器片	底面	8.0	3.8	4.2	土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	須恵器(赤土) 網代痕(縦方向)	19122
10	ASB SD10	土器片	底面	12.2	1.8		土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	須恵器(赤土) 網代痕(縦方向)	19120
11	ASB SD11	土器片	底面	18.5			土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	須恵器(赤土) 網代痕(縦方向)	19124
12	DSZ SD12	土器片	底面	11.4			土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	須恵器(赤土) 網代痕(縦方向)	19125
13	DSZ SD13	土器片	底面	13.0	3.1	45.0	土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	須恵器(赤土) 網代痕(縦方向)	19126
14	DSZ SD14	土器片	底面			4.8	土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	須恵器(赤土) 網代痕(縦方向)	19129
15	DSZ SD15	土器片	底面	10.2	5.0	4.8	土色・黄褐色	土色・黄褐色	溝埋	須恵器(赤土) 網代痕(縦方向)	19127



第7図 出土遺物実測図(S=1/3)

## 第4章 第8次調査

### 第1節 発掘・整理作業の経過

平成15年3月17日付の野々市町北西部土地区画整理組合からの埋蔵文化財発掘調査依頼文書を受けて、同年3月24日に発掘調査実施計画書を提出、同日付で土地区画整理組合との埋蔵文化財発掘調査委託契約を取り交わしている。文化財保護法58条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は平成15年4月1日付教文第6号で野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会へ報告した。

現地での作業は平成15年4月7日より開始した。調査区は北からA区～E区の5地区設定とし、最初は大型重機による遺構面までの掘削を行い、A区を4月17日完了している。作業員による人力作業は5月1日より開始した。作業は調査区周辺の環境整備、遺構検出を行い、縮尺1/100の遺構略図を図化しながら遺構の掘削を進めていった。A区については、斜めに横断するように自然河道跡が確認され、その遺構についてはトレンチ掘削に留め完掘は行わなかったが、その周辺には複雑に切り合う溝や、多数のピットを確認し、調査区南側では掘立柱建物を3棟検出した。A区遺構完掘後は遺構清掃作業を行い8月28日に空中写真測量を実施した。B区～E区については6月26日～7月1日に重機掘削を行い、B・C区では竪穴建物や竪穴状遺構など古代から中世の遺構を確認し、D・E区については近世の溝や較部を確認した。B区～E区の空中写真測量は10月3日に実施し、その後現場で遺構の個別写真の撮影や土層断面実測作業などの残務作業を行い、10月7日に現地での調査を終了した。

出土遺物整理作業は平成16年度に実施した。遺物の整理作業は臨時作業員が3名担当し、遺物の洗浄・注記・実測図作成及び遺物実測図トレース作業を行った。

報告書の刊行作業は平成23年12月より開始し、原稿執筆、図版作成、遺物写真撮影、報告書編集を行い、平成24年3月に刊行した。



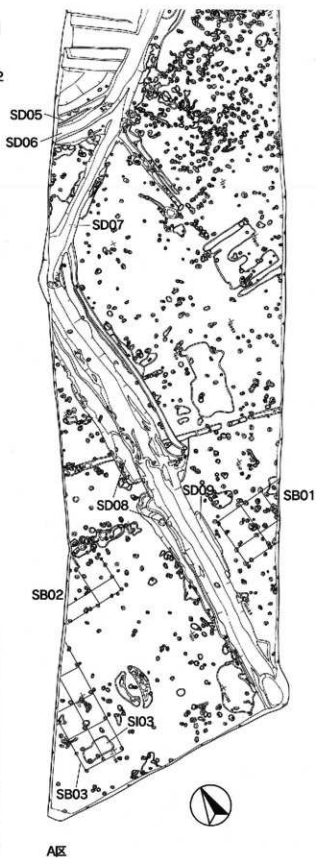
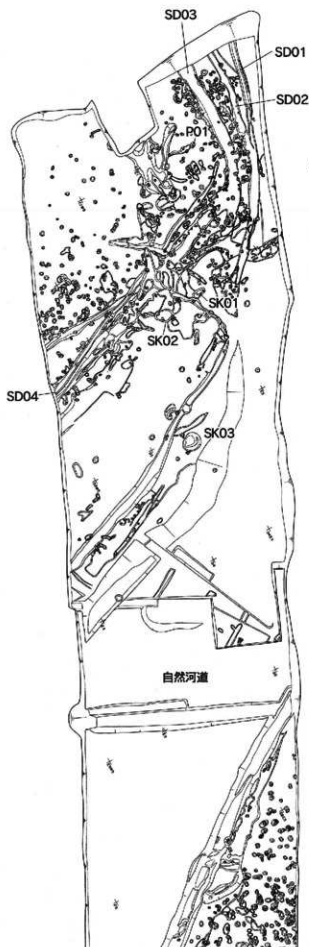
遺構検出状況



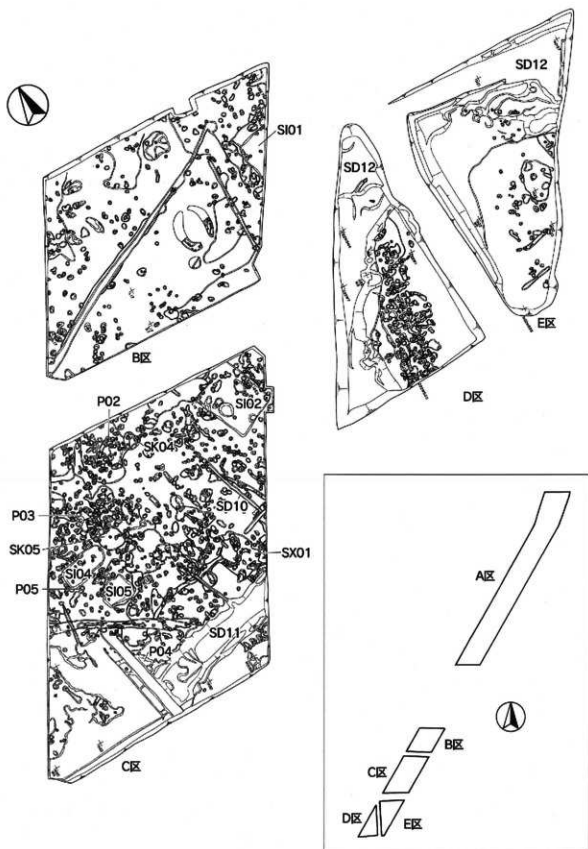
遺構掘削作業

### 第2節 調査の方法

調査の実施にあたっては公共座標を基準とした10m×10mのグリッド杭の設定を外部委託により行った。アルファベットと算用数字を用いてグリッド割を行っている。グリッド杭設定後本格的な調査を開始している。作業の内容は人力による遺構の検出・掘削や各遺構の記録の図示、写真撮影などである。調査の手順としては、設定した調査区ごとに調査を行い、遺構密度の高低差はあるものの、各調査区で遺構・遺物を確認した。第8次調査では竪穴建物、掘立柱建物、竪穴状遺構、土坑、溝などの遺構を検出した。遺構検出後は略図を作成している。略図作成後遺構の掘削を行い、主要遺構や遺物が出土した







第8図 三日市A遺跡(第8次)遺構平面図(S=1/300)

ものについては、記録作業を行ってから完掘した。記録作業はスケール1/20で記録を行い、遺構番号は出土した遺物の取り上げと同時に番号付す方法を取った。遺構の上層断面や遺物の出土状況の写真撮影は白黒フィルム、カラーリバーサルフィルムを使用し、デジタルカメラでの撮影も行っている。全ての遺構完掘後は調査区内の清掃等を行い、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影と測量を実施した。空中写真測量終了後は堅穴建物内のカマドの土層断面の実測を行い現地調査を終了した。

整理作業については、野々市市ふるさと歴史館内の調査整理室で実施した。整理作業の手順は、出土した全ての遺物を洗浄し、乾燥した遺物に遺跡名や出土した遺構番号などを注記した。注記後は可能なものは接合を行い、残りの状態の良好なものについては実測図を作成し、トレースを行っている。その後現地調査で記録を行った土層断面図などのトレースも実施した。

これらの作業完了後、報告書作成作業に取り掛かり、原稿執筆、報告書掲載の遺物の写真撮影、図面、写真のレイアウト等を行い報告書を刊行した。

### 第3節 遺構

第8次調査では古代・中世・近世の遺構を確認している。縄文時代・弥生時代については明確な遺構は確認できていないが、A区自然河道などから縄文時代・弥生時代の遺物が確認されている。遺構の密度についてはA・B・C区では集落跡であることを裏付ける遺構が確認されているが、D・E区では近世の河道と古代の被部が確認されており、遺構の密度も希薄となる。

以下は遺構の概要である。

#### 古代以前の遺構

##### 自然河道

A区北～中央部分を斜めに横切る河道である。トレンチのみの掘削にとどめた。幅は17m、深さは1.3mで、河道南側肩部はSD09と切り合う。遺物は縄文土器(1・4・6)、弥生土器(7～9)が出土している。

#### 古代の遺構

##### SI01(第9図)

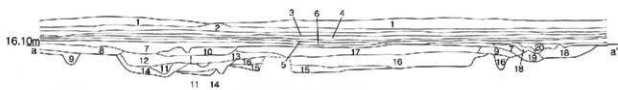
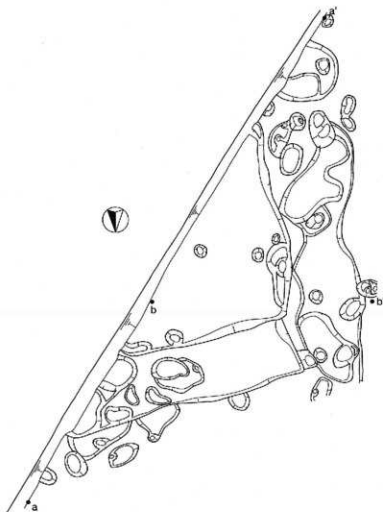
B区北東で確認した。南辺と東辺が調査区外となる。確認できるところで東西ラインが2.7m、南北ラインが3.1mであった。床面は整地されており、貼床を確認した。カマド及び焼土は確認していない。遺物は土師器壺(14)、須恵器有台坏(15)、無台坏(16)がそれぞれ出土している。

##### SI02(第10図)

C区北東隅で確認した。建物の北西部分が別の遺構に切られているので全容は分らないが、平面プランは隅丸方形を呈する。東西ラインが3.9m、南北ラインは4.3m以上で、北東隅にはカマドの痕跡と思われる焼土塊が広がっていた。煙道は確認できていない。堅穴内の遺物はほとんどがカマドの周辺で出土しており、建物南側には貼床面が確認できた。遺物で図示できたものは土師器の壺7点(17～23)、須恵器の坏4点(24～27)、須恵器甗(28)の12点であった。

##### SK04(第15図)

C区北側で確認し、SI02の6m程西に位置する。形は甗で、内部にピットを数基確認している。長径で1.4m、短径1.3mを呈し、深さは48cmであった。遺物は弥生土器の底部片が1点と古代のものと思われる土師質の土器が数点出土している。



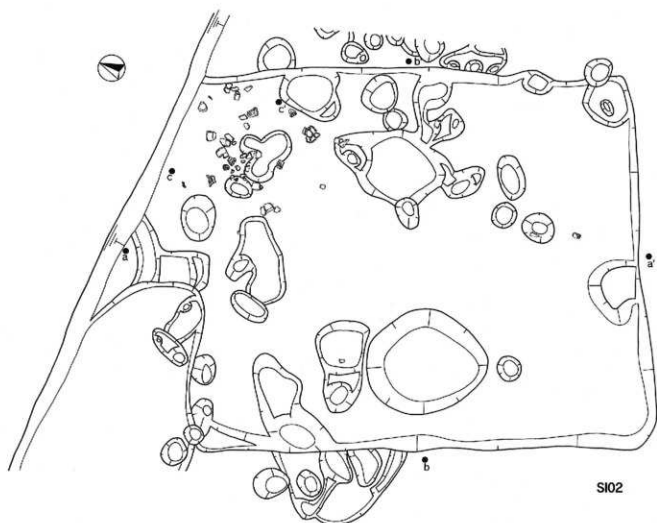
- |                      |  |
|----------------------|--|
| 1. 砂土                | 11. 淡灰色粘質土(黄色ブロック層)                              |
| 2. 砂土                | 12. 褐色粘質土(黄色ブロックごく少量層)                           |
| 3. 砂土                | 13. 褐色粘質土(褐色が12より濃い, 100のブロックが少量層)               |
| 4. 砂土                | 14. 褐色粘質土(黄色ブロック層)                               |
| 5. 砂土                | 15. 淡灰色粘質土(黄色ブロック層, 灰色は11より少し濃い) (陶器)            |
| 6. 黄灰色粘質土(褐色ブロック少量層) | 16. 褐色粘質土(黄色ブロック層)                               |
| 7. 黄灰色粘質土(褐色ブロック混分層) | 17. 褐色粘質土  |
| 8. 淡褐色粘質土            | 18. 高灰色粘質土(黄色ブロック, 褐色ブロック, 褐色粘質土層)               |
| 9. 淡黄色粘質土            | 19. 高灰色粘質土(黄色ブロック, 褐色粘質土層) 褐色粘質土層に黄色ブロックが18より少ない |
| 10. 黄褐色粘質土           | 20. 黄灰色粘質土                                       |



- |                                   |
|-----------------------------------|
| 1. 褐色粘質土(黄色ブロック層)                 |
| 2. 淡灰色粘質土(黄色ブロック層, 黄色ブロック多い, 陶器)  |
| 3. 淡灰色粘質土(黄色ブロック層)                |
| 4. 褐色粘質土                          |
| 5. 淡灰色ブロック, 黄色ブロック, 淡灰色ブロック混じった土色 |



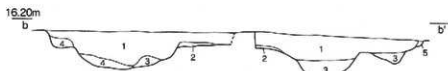
第9図 B区 SI01遺構図・土層断面図(S=1/60)



SI02



1. 赭褐色粘質土
2. 赭褐色粘質土(黄色ブロック層)
3. 灰色粘質土
4. 灰色粘質土(黄色ブロック層)
5. 赭褐色粘質土(赭灰色ブロック、黄色ブロック(図)層、粘厚層)



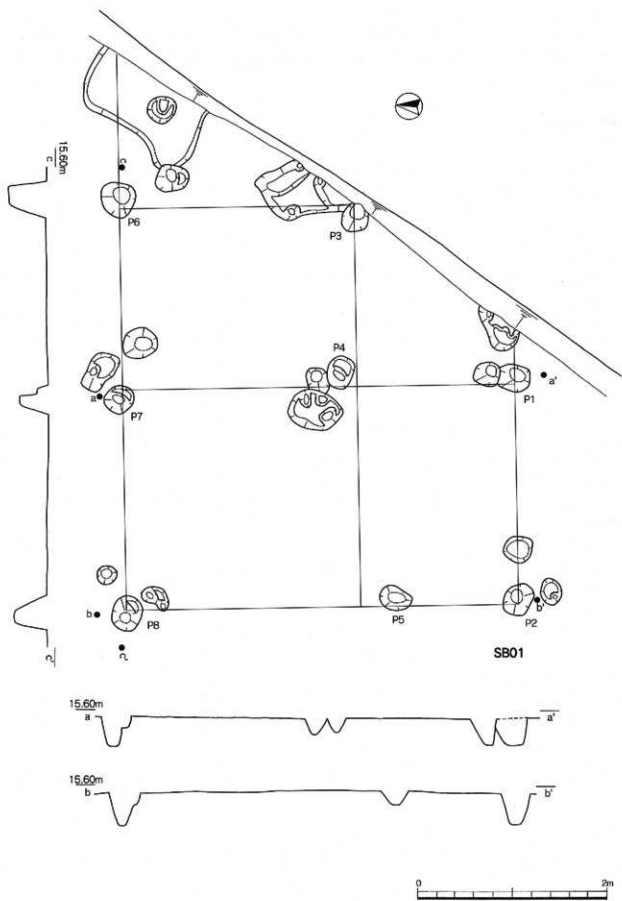
1. 赭褐色粘質土
2. 赭褐色粘質土(黄色ブロック(図)層、粘厚層)
3. 赤褐色粘質土(黄土)
4. 赤褐色粘質土(黄土、3より更に赤色強し)
5. 淡灰黄色粘質土(赭灰色ブロック層)



1. 淡灰黄色粘質土(黄色ブロック(細かい)層)
2. 赤褐色粘質土(黄色ブロック層)
3. 赤褐色粘質土(黄土)
4. 赤褐色粘質土(黄土、3より更に赤色強し)
5. 淡灰黄色粘質土(赭灰色ブロック層)
6. 淡灰黄色粘質土



第10図 C区 SI02遺構図・土層断面図(S=1/40)



第11图 A区 SB01遺構図・断面図(S=1/40)

## P02

C区北壁付近で確認した。SK04の西1.0mの場所に位置する。直径24cm、深さ18cmの穴である。遺物はほぼ完形に近い須恵器(38)が出土しており、付近に位置するピットからも同一個体の破片が出土している。

## 中世の遺構

### SB01 (第11図)

A区南側の東壁付近で確認した軸N-10°Wの建物である。建物東側は調査区外のため確認できていない。2間以上×2間の総柱建物で、桁行4.2m以上×梁行4.1mの東西棟である。柱穴の形は歪な円形で、直径30~39cmで、深さは16~40cmであった。P3-P4-P5ラインはP1-P2ラインに近接し、P5は東西ラインから40cmほどずれる。P7からは縄文土器が1点出土している。

### SB02 (第12図)

A区南側西壁付近で確認した建物である。軸N-4°Wで西側は調査区外となる。桁行2間以上×梁行2間で4.7m以上×3.2mの総柱建物である。柱穴の形は歪なものではなく楕円形や円形に近い形がほとんどであった。直径20cm台のものが多く、楕円形のP4のみが長辺35cmであった。深さは10cm~34cmであった。何れの柱穴からも遺物は出土していない。

### SB03 (第13図)

A区SB02の南側に位置する軸N-1°Eの建物である。建物北側は調査区外となる。桁行2間×梁行4間以上で9.0m以上×5.8m以上を測る。柱穴の形状は略方形や楕円形が多く、径25cm~38cm、深さ10cm~33cmである。P1-P2間は他の柱穴の間隔よりも狭い。柱穴からの遺物の出土は無い。

### SI03 (第14図)

A区南で検出した堅穴状遺構でSB03内部の東南隅に位置する。形は歪な方形で、長辺は2.5m、短辺は長いところで1.3mであった。深さは最深部で10cmと浅い。SB03と軸が合うため付属施設と考えられる。

### SI04 (第14図)

C区西壁近くに位置する堅穴状遺構である。長軸3.85m、短軸1.75mで深さは最深部で22cmであった。内部には数基のピットが確認している。土師器皿が4点(51~54)と本報告に掲載はできなかったが、珠洲焼片と鉄製品が出土している。

### SI05 (第14図)

C区中央付近に位置し、SI04の東南に位置する。形は歪で内部には径20cm~55cmのピットを数基確認している。南はテラス状になっており北側は6cm低くなる。最深部で25cmであった。遺物は土師器皿が3点(55~57)出土している。

### SK01 (第15図)

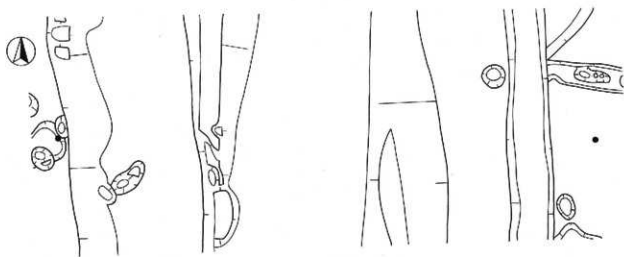
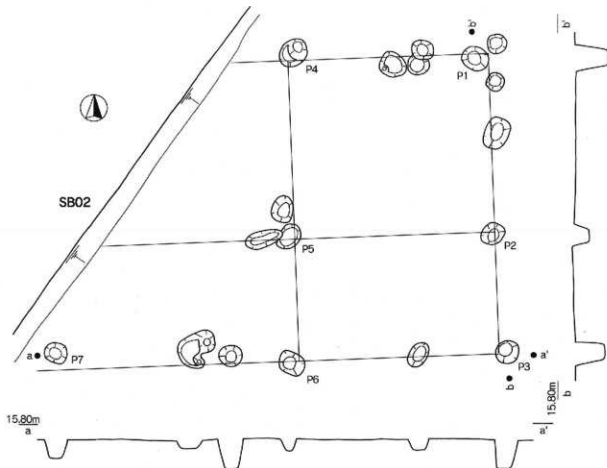
A区北で確認した歪な形の土坑である。東西ラインが長辺となり1.1m、短辺0.55mであった。東西にテラス部分があり、中央が深い。深さは中央の最も深い部分で40cmであった。遺物は出土していない。

### SK02 (第15図)

A区北、SK01から2m南西で確認された土坑である。形は楕円形を呈し、長径が1.50mで短径が1.05m、深さは最深部で39cmであった。遺物は須恵器(3)が1点出土している。

### SK03 (第15図)

A区北側の自然河道北岸付近に位置する。形は直径1.5m有する歪な円形で、南に一段テラスが設けられており、最も深い部分は42cmであった。遺物は出土していない。

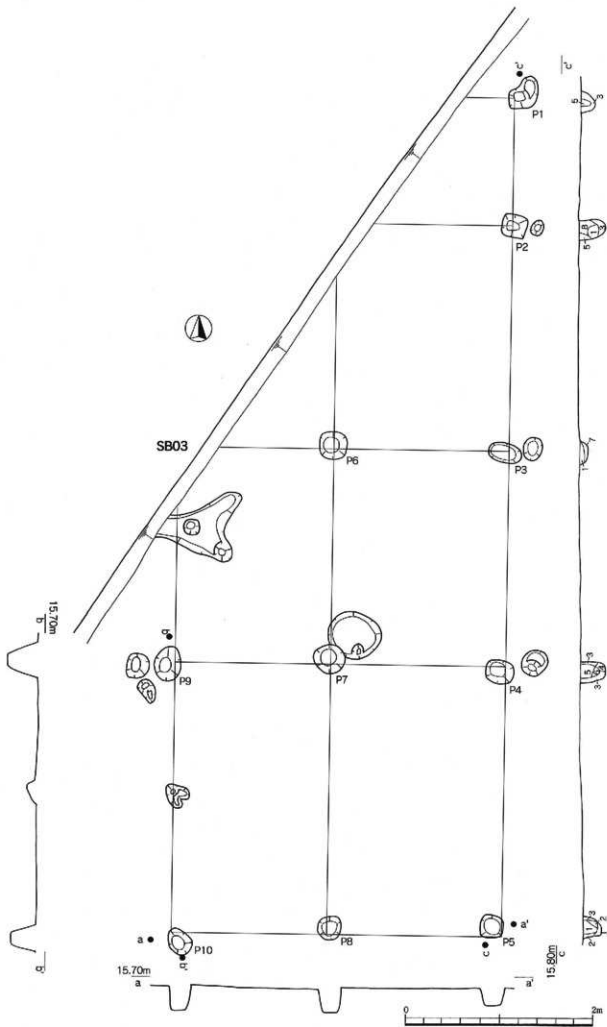


1. 褐色砂質土(黄色ブロック(小)部)
2. 褐色砂質土(黄色ブロック(小)部)
3. 褐色砂質土
4. 灰色砂質土(黄色ブロック(小)部)
5. 灰色砂質土(黄色ブロック(小)部)
6. 褐色砂質土
7. 灰色砂質土(黄色ブロック(小)部, 4よりサマシラした土)
8. 灰色砂質土(黄色ブロック(小)部, 褐色ブロック(小)部)
9. 灰色砂質土(6より厚, 褐色ブロック(小)部, 褐色ブロック(小)部)
10. 灰色砂質土(褐色ブロック部)
11. 褐色砂質土
12. 灰色砂質土(7より厚, 7よりブロック大)
13. 褐色砂質土
14. 灰色砂質土
15. 褐色砂質土
16. 褐色砂質土
17. 褐色砂質土
18. 褐色砂質土(16より粘質土)
19. 灰色砂質土と褐色砂質土との混土(白灰色砂質土, 黄色ブロック部)
20. 褐色砂質土(褐色ブロック, 褐色ブロック部)

21. 黄色ブロック, 褐色ブロック, 褐色ブロックとの混土
22. 褐色砂質土(褐色ブロック, 黄色ブロック部)
23. 褐色砂質土
24. 褐色砂質土(褐色)
25. 褐色砂質土
26. 褐色砂質土(褐色)
27. 褐色砂質土(褐色)
28. 褐色砂質土(褐色)
29. 褐色砂質土(褐色)
30. 黄色ブロック, 褐色ブロック, 褐色ブロックとの混土(褐色ブロック部)

31. 褐色砂質土(黄色ブロック粘質土)
32. 褐色砂質土
33. 褐色砂質土(褐色ブロック, 黄色ブロック部)
34. 褐色砂質土(褐色砂質土)
35. 褐色砂質土(褐色, 褐色ブロック部)
36. 褐色砂質土(褐色)
37. 褐色砂質土(小石部)
38. 褐色(3cm-10cm)
39. 褐色砂質土(褐色)
40. 褐色砂質土(褐色)
41. 褐色砂質土(褐色)
42. 褐色砂質土(褐色)
43. 褐色砂質土
44. 褐色砂質土
45. 褐色砂質土(褐色, 40より厚)

第12図 A区 SB02・SD遺構図・土層断面図(S=1/40)



8. 黒灰色粘質土(より黄色アロク層より)

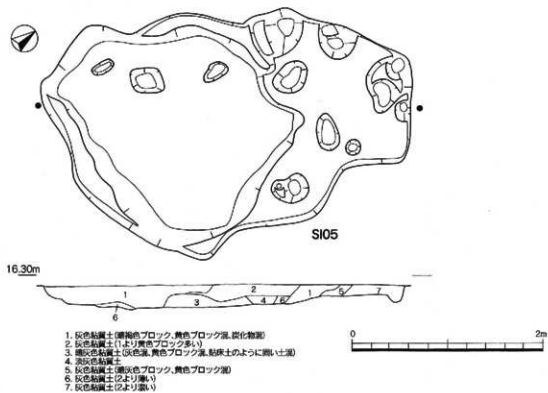
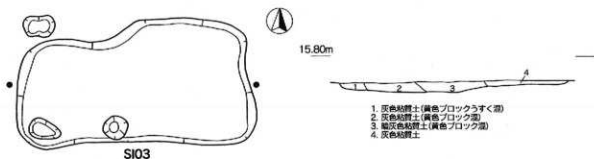
7. 黄灰色粘質土

6. 赤褐色粘質土(アロク層より)  
 5. 黒褐色粘質土(アロク層より)  
 4. 黒褐色粘質土(アロク層より)  
 3. 赤褐色粘質土(アロク層より)  
 2. 赤褐色粘質土(アロク層より)  
 1. 赤褐色粘質土(アロク層より)

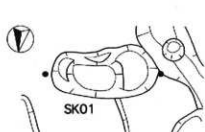
1. 赤褐色粘質土(アロク層より)  
 2. 赤褐色粘質土(アロク層より)  
 3. 赤褐色粘質土(アロク層より)

第13図 A区 SB03遺構図・土層断面図(S=1/40)





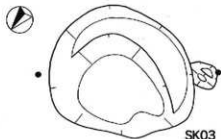
第14図 A・C区 SI03~05遺構図・土層断面図(S=1/40)



16.30m



1. 暗灰色粘質土
2. 暗灰色粘質土(黄色ブロック層)
3. 灰褐色粘質土
4. 黄色に灰褐色ブロック層



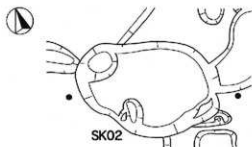
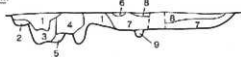
14.90m



1. 暗灰色粘質土
2. 灰褐色粘質土
3. 暗灰色粘質土(灰色、黄色ブロック層)
4. 暗灰色粘質土(黄色がほとんどない)
5. 暗灰色粘質土(灰色、黄色ブロック少量)
6. 灰褐色粘質土
7. 暗灰色粘質土



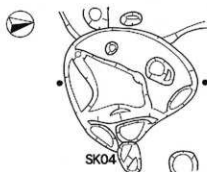
16.30m



15.40m



1. 明灰褐色粘質土(黄色ブロック層)
2. 淡灰色粘質土(暗灰色ブロック層)
3. 黄褐色粘質土
4. 淡黄色粘質土(灰色ブロック層)
5. 明灰色粘質土(灰色ブロック、黄色ブロック層)



16.20m



1. 淡明灰色粘質土
2. 淡灰色粘質土
3. 灰色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 淡明灰色粘質土
6. 灰色粘質土(黄色ブロック層)
7. 明灰色粘質土

1. 明灰色粘質土(黄色ブロック、暗褐色ブロック、灰化堆積)
2. 暗灰色粘質土(黄色ブロック、暗褐色ブロック、黄色ブロック(大)層)
3. 暗褐色ブロック、黄色ブロックの混ざったもの
4. 灰褐色粘質土(黄色ブロック層)
5. 淡明灰色粘質土(黄色ブロック層)
6. 灰褐色粘質土
7. 灰色粘質土(黄色ブロック層)
8. 明灰褐色粘質土(黄色ブロック層)
9. 明灰色粘質土(黄色ブロック層、粘土質塊あり)



第15図 A・C区 SK遺構図・土層断面図(S=1/40)

#### SK05 (第15図)

前述のC区SI04の東隣りに位置する。周辺はピット等遺構が多いため、一部切り合っている。形は歪な方形と思われる、長辺1.85m、短辺1.7mであった。深さは18cmである。遺物は土師器片が数点出土している。

#### SD01

A区北側を走る溝である。自然河道の北側に沿うように進路をとり、西から東へ向かい、途中でカーブし北調査区外へと伸びる。幅50～120cm、深さは14cm～27cmを測る。遺物は弥生土器(10)や瀬戸美濃の小片などが出土している。

#### SD02

SD01とほとんど同じ流路であるが北側で分岐し調査区外へ抜けていく。分岐した箇所の溝幅は50cm～70cmで深さは7cm～55cmであった。北壁から3m～7mの区間は他の箇所よりも深くなる。遺物は天目茶碗(58)、土師器皿、弥生土器の小片が出土している。

#### SD03

SD02の西側に位置する。西側の壁から東へ進み、20m程進んだところで北に進路を変えて調査区外へ伸びる。幅80cm～120cm、深さは6cm～56cmを測る。遺物は縄文土器の破片、土師器皿(59)が出土している。

#### SD04

A区SD03とほぼ並走する溝である。SD03同様西側の壁から東へ進み、20m進んだところで北に進路を変え、更に2mほど進んだところで終焉する。幅は20cm～30cm、深さは11cm～47cmであった。出土した遺物は縄文土器、土師器皿の小片であった。

#### SD09

A区南に位置し、SD07と切り合う溝である。長さ5mで、切り合っているため全体は明らかでないが、確認できたところで最大幅60cm、最深部で18cmであった。上色は黒色土で、出土した遺物は珠洲焼のすり鉢(66)、越前焼のすり鉢(67)が出土している。

#### P03

C区北西に位置し、SK05の北2.0mに位置する。形は円形で、直径30cm、深さ18cmであった。遺物は、土師器皿が(31)の他に数点出土している。

#### P04

C区南に位置する。後述する近世溝のSD11の北側で確認している。形は歪で深さは30cmを測る。遺物は灯明皿(71)が1点出土している。

#### P05

C区SI04の南隣りに位置する。直径36cm、深さは25cmであった。遺物は卸目の確認できる珠洲焼すり鉢(73)が1点出土している。

### 中世以降の遺構

#### SD05

A区中央部に位置する。西壁から東へ進み、後述するSD07に合流する。自然河道の南側に沿うように進路をとる。溝幅は20cm～30cmで深さは7cm～13cmであった。出土した遺物は近世陶器と煙管の雁首が1点ずつ出土している。

#### SD06

A区中央SD05と並行して走る溝である。SD05同様西壁から東へ進み、後述するSD07に合流する進路をとる。溝幅は1m12cmで深さは75cmであった。遺物は珠洲焼すり鉢や近世陶磁器、動物のものと思われる骨片が出土している。

#### SD07 (第12図)

A区を走る溝である。A区東南隅から北へ進み、37m程進んだところでクランクし進路を東に変えてA区東の調査区外へ伸びる。幅1m16cm～2m10cm程で深さは50cm～80cmを測る。出土した遺物は珠洲焼や中国製青磁など中世のもの(60～64)も出土しているが、ほとんどは近世の陶磁器類であった。

#### SD08 (第12図)

A区で確認した溝である。途中1mほど途切れるが、確認できた長さは26mほどで西壁から調査区外へ伸びていく。時期はSD07の方が新しく、切り合っているため全体の規格は定かではないが、確認できたところで幅1m50cm、深さは深い部分で60cmであった。遺物は古代の上器(29～37)土師器皿(65)や近世の陶磁器が出土している。

#### SD12

D・E区で確認された溝である。完掘した状況から判断すると蛇行して流路をとっていたと思われる。出土した遺物はほとんど近世の陶磁器であったが、中世の陶磁器(68～70)なども出土した。

### 第4節 遺物

本調査では縄文時代、弥生時代、古代、中世、近世の4時期の遺物が出土している。近世では溝から出土したものが多く出土しているが、報告書ページ数に制限があるため本報告では近世以外の出土した遺物の中から遺構から出土したものや、特出すべき形態のものを選定し実測図を掲載した(第16図～19図)。

1～6は縄文土器で、包含層、A区自然河道から出土したものが多く。1・2、5・6は深鉢で、1は口縁のみの出土である。2は縦位に条痕文が施され、屈曲部に列点文が施文されている。1・2共に晩期中葉～後葉の下野式土器である。5は口縁がくの字状の深鉢である。外面は横位に条痕文が施され、内面には輪積み痕が確認できた。6は内外面に条痕文が施され、内面上部には粉痕を確認している。長竹式の後半期のものである。3・4は底部のみの出土で、4は網代圧痕が底部外面に見える。

7～13は弥生土器で、7～9については何れもA区自然河道出土の柴山出村式の土器である。7は深鉢で外面には斜位に条痕文が施されている。8は甕で内外面に赤彩、条痕文が斜位に施されている。11は口縁外面には棒状の工具による沈線が有している。9は体部のみの出土で、外面には赤彩と条痕文が確認できた。10・11は甕の有段口縁～頸部で、10は口縁外面の擬凹線7本を確認している。12・13は高坏の坏部である。12は器形から推察して器台になる可能性がある。外面に擬凹線を6本有し、内面にはミガキ調整を確認している。13は外面にミガキ調整痕を確認し、内面には細かいキズが残っている。10～13は弥生時代後期後半の法仏式のものである。

14～50は古代の土器で、14～16はB区SI01から出土している。14は内外面に赤彩が施された土師器甕である。外面には調整の痕が強く残っている。15・16は須恵器坏である。17～28はC区SI02より出土したものである。17～23は土師器甕で、口縁～体部のものがほとんどである。土師器甕の底部の出土は無かった。17は口縁端部に丸みを持ち、わずかであるがつまみ上げている。18は口縁が短く外反して、端部を丸く仕上げている。19の口縁は短いが大きく外反し、僅かにつまみ上げて端部を仕上げている。22は内外面にカキ目痕が残るが、特に内面の痕跡が強い。23は体部内外面、及び口縁内面にカキ目痕がたっぷり残っており、外面には縦位に工具痕による調整痕が数本残っている。短い口縁は端部を垂直につまんで仕上げている。24～28は須恵器で、24～27は坏である。25は口縁～体部の出土であるが24と比定して立ち上がりか緩やかである。26・27は底部で27は厚みのあるつくりで底部9.5cmとやや大型である。28は台付の甕底部である。29～37は近世溝SD12より出土したものである。29～33は須恵器の坏である。31・32は底部外面に強いナデ痕が確認できる。34は底部のみの出土であるが底径13.2cmと大型であるこ

とから須恵器蓋になると思われる。35は須恵器の壺の口縁部で、口縁は短く垂直に立ち上がる。外面には一部焼成時の火ぶくれの痕が残っている。36・37は須恵器瓶の体部下半～底部である。36は外面には自然灰が降りかかり、高台端部が欠けている。2点とも形状・底径から台付壺になる可能性がある。38～50はSX、ピット、包含層等から出土したものである。39はSX01から出土した土師器の塊で、内外面に赤彩が施され、体部内外面に煤が付着している。41は土師器甕の底部で、直径1.4cmの穿孔が1ヶ所確認できる。46はD区の鞍部から出土したもので坏を上脣焼成している。

51～80は中世の土器・陶磁器を掲載したものである。51～54はSI04から出土した土師器皿である。51・52は口縁部を外反させ、体部下半に稜をもつ。51は口径6.5cmとしているが、小片の実測ため、径がもう少し大きくなるかもしれない。53は平底で器高が1.2cmと低い。3点ともAタイプである。54は厚手のつくりのCタイプで、口縁端部をつまんで仕上げている。SI04は土師器皿片の出土が多いが、他に実測には至っていない珠洲焼の破片や鉄製品も出土している。55～57はSI05から出土した何れもAタイプの土師器皿である。57は平底で口縁は8.1cmを測る。器高は低く立ち上がりも弱い。底部内面に強いナア痕が残る。58はA区SD02から出土した瀬戸美濃の天日茶碗である。外面の露胎部分が僅かに確認できる。59はSD03出土のAタイプの土師器皿である。深身タイプのもので内外面磨耗が著しいが体部下半外面に指圧痕が残っている。60～64は近世溝SD07より出土したもので60は口縁内外面に灯芯油痕が付着しており、灯明皿に使用したものである。61は珠洲焼の壺である。口縁～頸部のみ出土で叩き痕が僅かに確認できる。

62・63は珠洲焼すり鉢である。63は底部のみで卸目を9本確認できた。底部外面には工具痕が深く残っている。64は瀬戸美濃の折縁小皿である。65は近世溝SD08から出土した土師器皿である。66・67はSD09出土のもので、67は越前焼の鉢である。卸目は確認できないが、内面が滑らかなことからすり鉢として使用されたと思われる。68～70は近世溝SD12のもので、68・69は瀬戸美濃で、68は形状から入子と思われ、69は卸皿で底部外面に糸切りの痕跡を見ることができる。70は白磁皿で、高台部分に1ヶ所の挟り込みと、底部内面には1ヶ所の胎目を確認している。71～73はピットから出土したものである。71はP04の土師器皿で、口縁内外面に煤が付着しており、灯明皿として使用している。72はP03から出土のAタイプの土師器皿である。口縁径が15cmで大型の類になる。外面に横ナデによる稜をもつ。実測には至らなかったが同一ピットから他にも土師器皿が数点出土している。74～80は壁面及び包含層出土の土器・陶磁器である。76・77は瀬戸美濃で、76は縁軸小皿で、口縁内外面に施軸されている。77は底部のみ出土であるがおそらく平底末広碗になる。底部外面に回転糸切りの痕跡と僅かであるが灰軸が確認できる。78は瀬戸美濃の合子の蓋になると思われる。79は青磁の筒型碗で、高台は低く底部外面は無軸である。

81・82は砥石である。81は長辺4面に使用痕が確認できる。82は1面のみ使用痕を確認できたが他は大きく欠損している。

註 土器や陶磁器の分類・年代決定については以下の文献を参考にした。

- 柿田 祐司 2006「加賀・能登の標相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会  
藤田 邦雄 1997「第2章 第2節 中世加賀国の土師器標相」『中近世の北陸Ⅱ』北陸中世土器研究会編  
吉岡 康輔 1994「中世須恵器の研究」吉川弘文館  
藤沢 良祐 2008「中世瀬戸窯の研究」高志書院

## 第5節 小 結

今回発掘調査では縄文時代、弥生時代、古代、中世、近世の遺構・遺物を確認することができた。

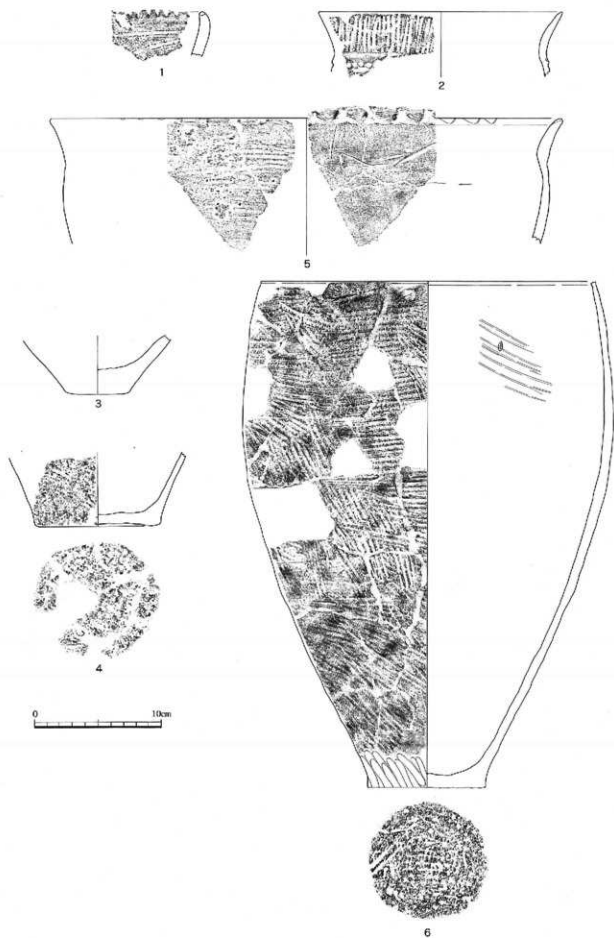
縄文時代では、遺構からの出土はSB01柱穴からの出土だけである。これについてはSB01が中世の遺構であることから流れ込みによるものとする。その他は包含層、自然河道からの出土であった。自然河道については弥生初期の遺物も確認されており、この時期までは河として機能していたことが分かる。弥生時代では竪穴建物など集落であると決定付ける遺構は確認していない。ピットなどから遺物の出土が見られ、周辺地の調査では弥生時代の集落跡を確認していることから、当該地における人の動きがあったことが窺える。

古代については、SI01・02の2棟を確認している。掘立柱建物は確認していない。SI01は8世紀後半、SI02は8世紀中頃のものである。2棟には時期に差があることから、SI02が建てられた後、何らかの理由で廃絶後、SI01へ移動したと推察する。

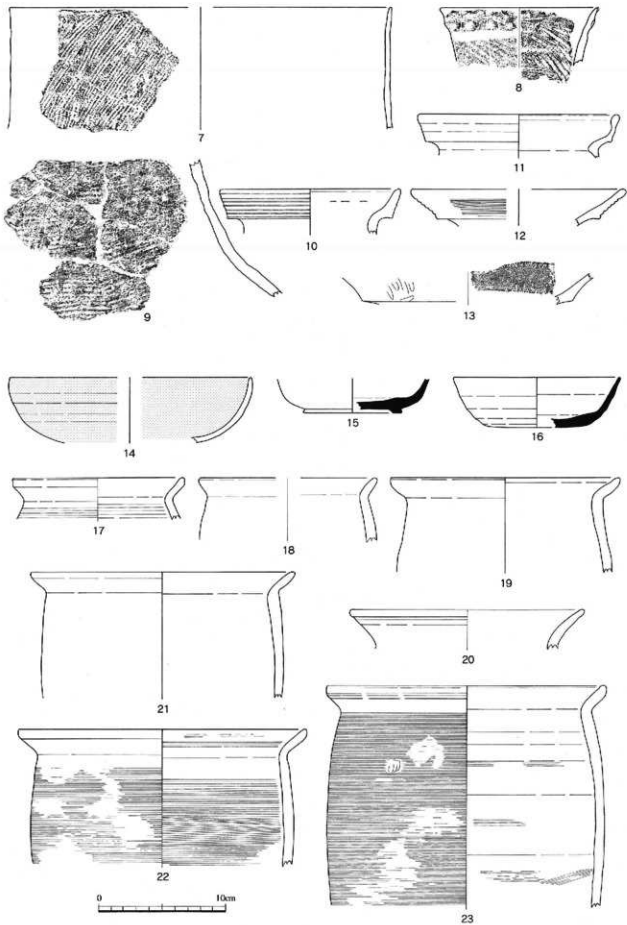
中世では主な遺構として掘立柱建物、竪穴状遺構、土坑、溝などが確認されている。中世遺構から出土した遺物については土師器皿、珠洲焼すり鉢、越前焼すり鉢などが出土している。時期は14世紀中頃～後半とする。掘立柱建物から遺物は出土していないが、当調査で出土した遺物、周辺調査の中世集落の時期から判断して掘立柱建物も当該期のもと考えられる。

3棟の掘立柱建物は建て替えの痕跡は確認しておらず同時期に存続していたと推察する。SB03内で確認したSI03から遺物は出土していないがSB03とセット関係になる可能性がある。C区で確認したSI04・SI05周辺からは掘立柱建物は検出していない。

近世については溝のみ検出している。自然河道、農業用水として使用されていたと思われるが溝内からは近世期はもちろん、今回の調査時期以外の時期の遺物も出土していることから、調査地周辺に別時期の集落域の存在の可能性も考えたい。

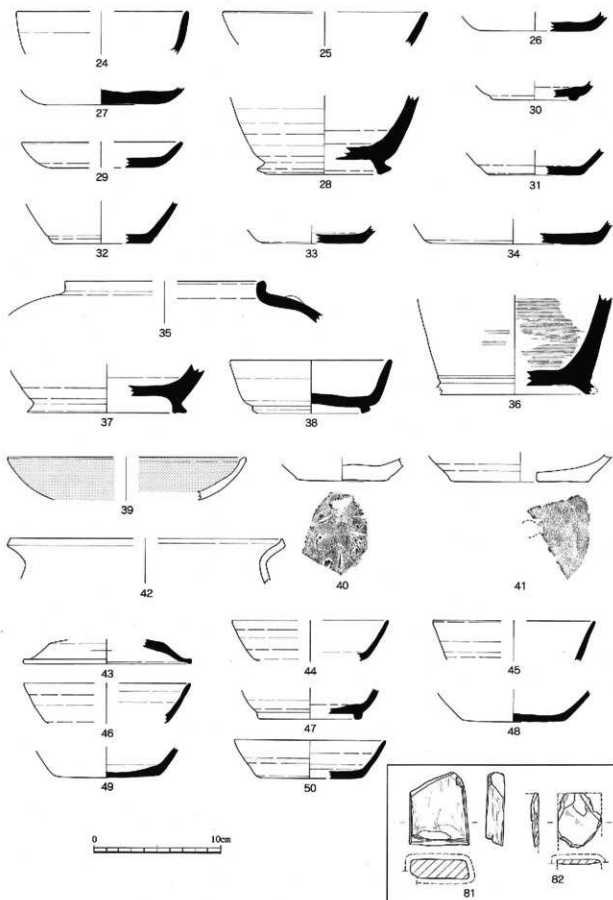


第16図 出土遺物実測図1 (S=1/3)

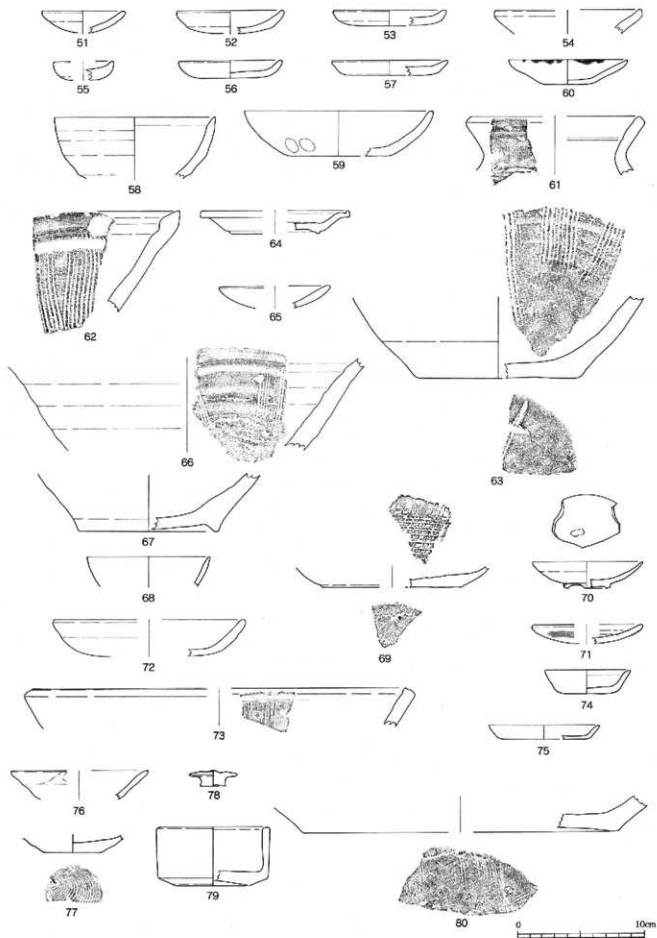


第17図 出土遺物実測図2 (S=1/3)





第18圖 出土遺物実測図3 (S=1/3)



第19回 出土遺物実測図4 (S=1/3)

第3表 出土遺物観察表1

実測番号	遺物	種類	口径	器高	底径	色調(穴)		残存率	備考	番号		
						色調(内)	色調(外)					
1	B8E 管倉	縄文 埴輪					にぶい黄褐色			口縁小片	H56	
2	D8E 付片一断面	縄文 埴輪	19.2				にぶい黄褐色、にぶい黄褐色			口縁1/5	外裏に灰付着	H81
3	B8E 保倉	縄文 埴輪			5.0		にぶい黄褐色、黒	赤灰		底面1/2		H52
4	A8E 自然河溝	縄文 埴輪		10.0			にぶい黄褐色、にぶい黄褐色	赤灰、黒代土質		底面完形	海砂層付あり 内裏に灰付着	H1
5	A8E SD017	縄文 埴輪	42.4				灰白色、黒灰	ナテ		口1/3	輪郭あり、灰色層あり 外裏に灰、赤代土質	N18
6	A8E 自然河溝	縄文 埴輪	26.3	40.3	9.3		にぶい黄褐色、黒	赤灰		口縁0/5、底面 削欠	海砂層付多量あり 内裏にモミ土あり	H110
7	A8E 自然河溝	弥生 瓦	030.2				にぶい黄褐色、黒灰	赤灰		口縁小片	外裏に灰付着	H2
8	A8E 自然河溝	弥生 瓦	12.6				にぶい黄褐色、灰、黄褐色	赤灰		口縁1/4		H3
9	A8E 自然河溝	弥生 瓦					にぶい黄褐色	赤灰		体部小片	海砂層付、赤色酸化層、 石あり	追加A
10	A8E SD01	弥生 瓦	14.3				にぶい黄褐色	ナテ		口縁1/2	赤色灰、黒色灰、石あり 内裏に粘土混合あり	H92
11	A8E FV1	弥生 瓦	16.0				洗灰層	ナテ		口縁1/7		N19
12	A8E SD03	弥生 瓦	07.0				洗灰層、灰白、にぶい黄褐色	黒色面層		口縁小片		H71
13	A8E SD10	弥生 瓦					洗灰層	ミガキ		1/8	赤色灰あり 内裏に粗かいキズあり、使用痕か	O14
14	B8E SD1	弥生 瓦	019.2				赤褐色、黒色	ヨコナテ、赤影		1/11		H47
15	B8E SD1	弥生 瓦		7.8			洗灰層	同色へろ削り		底面1/5		H48
16	B8E SD1	弥生 瓦	13.3	4.0	8.5		洗灰層	同色へろ削り		1/8		H48
17	B8E SD10	弥生 瓦	13.5				洗灰層	ナテ、カキ目		口縁1/5弱		O97
18	B8E SD10	弥生 瓦	04.1				洗灰層	ナテ、カキ目		口縁小片	赤色灰あり	O96
19	B8E SD10	弥生 瓦	18.0				洗灰層	ナテ、ヨコナテ		1/7	赤色灰あり 内外面に磨耗	O11
20	B8E SD10	弥生 瓦	18.4				洗灰層	ヨコナテ		口縁1/8	赤色灰あり	O8
21	B8E SD10	弥生 瓦	20.8				洗灰層	ナテ		1/7	赤色灰あり 内外面に磨耗著しい	O10
22	B8E SD10	弥生 瓦	22.7				洗灰層	カキ目		1/4弱	赤色灰あり	O9
23	B8E SD10	弥生 瓦	22.1				洗灰層	ナテ、カキ目、ロクロナテ		1/3弱	長石もしくは石英あり	O5
24	B8E SD10	弥生 瓦	03.5				洗灰層	ヨコナテ、カキ目		口縁小片	黒色灰あり、内裏に灰付着? 外裏面に磨耗痕ありか?	O7
25	B8E SD10	弥生 瓦	05.1				洗灰層	ナテ		口縁小片		O98
26	B8E SD10	弥生 瓦		9.0			洗灰層	同色へろおこし		底面1/3		O95
27	B8E SD10	弥生 瓦		9.5			洗灰層	同色へろおこし		底面1/2		O6
28	B8E SD10	弥生 瓦		9.4			洗灰層	同色へろおこし		底面1/4	黒色灰あり	O99
29	B8E SD06	弥生 瓦	02.6	0.2	08.0		洗灰層	ヨコナテ、同色へろおこし		底面小片		O99
30	B8E SD06	弥生 瓦		6.7			洗灰層	同色へろおこし		底面1/4		O117
31	B8E SD06	弥生 瓦		7.4			洗灰層	同色へろおこし		底面1/3		O119
32	B8E SD06	弥生 瓦		7.6			洗灰層	同色へろおこし		底面1/4		O116
33	B8E SD06	弥生 瓦		8.2			洗灰層	同色へろおこし		底面1/4		O60
34	B8E SD06	弥生 瓦		13.2			洗灰層	同色へろおこし		1/4弱		O118
35	B8E SD06	弥生 瓦	05.6				洗灰層	ナテ、同色へろおこし		口縁小片	外裏に一部灰よりあり	O115
36	B8E SD06	弥生 瓦	11.9				洗灰層	同色へろおこし		1/5弱	自然剥落	O113
37	B8E SD06	弥生 瓦		12.6			洗灰層	同色へろおこし		底面1/7		O114
38	C8E P02	弥生 瓦	12.7	4.2	8.0		洗灰層	ロクロナテ		口縁3/4、 底面完形	自然剥あり	O12
39	C8E SX01	弥生 瓦	018.0				洗灰層	ナテ、赤影		口縁小片	内外面に磨付着	O107
40	B8E 自然河溝	弥生 瓦		7.3			洗灰層	ナテ		底面1/3		H54
41	B8E 自然河溝	弥生 瓦		11.0			洗灰層	ナテ		底面1/5	底面穿孔	H123
42	D8E 付片一断面	弥生 瓦	022.0				洗灰層	ヨコナテ		口縁小片		H80
43	D8E 付片一断面	弥生 瓦	13.4				洗灰層	ヨコナテ		1/6		H74

第3表 出土遺物観察表2

発掘 番号	遺物 名称	種類 分類	口径 (cm)	高さ (cm)	長さ (cm)	色調(内)		残存率	備考	番号
						色調(表)	調質(表)			
44	DIX 包含層～前部	瓦片 環	(12.4)			灰		1/9		H73
45	DIX 包含層～前部	瓦片 環	(12.4)			灰		口縁小片		H76
46	DIX 包含層～前部	瓦片 環	(13.2)			灰		口縁小片		H79
47	DIX 包含層～前部	瓦片 環			8.4	灰		底面 1/5		H77
48	DIX 包含層～前部	瓦片 環			8.2	灰		底面 1/3		H75
49	DIX 包含層～前部	瓦片 環			8.4	灰		底面 1/4	焼成不良	H78
50	DIX 包含層～前部	瓦片 環	12.0	3.05	8.6	灰、灰白		1/3		H72
51	CFK S804	土師器	6.5	1.6	1.5	ナテ				O102
52	CFK S804	土師器	8.4	1.8	3.0	に灰い壁		1/3	黒色粒あり	O100
53	CFK S804	土師器	8.8	1.2	6.0	ナテ		1/5弱	赤色粒あり 底面外周磨耗	O103
54	CFK S804	土師器	(11.4)			洗滌後	ヨコナテ	口縁小片		O101
55	CFK S805	土師器	(4.7)	(1.3)	(2.2)	に灰い壁	ナテ	小片	赤色粒あり	O106
56	CFK S805	土師器	8.1	1.4	4.0	に灰い壁	ナテ	1/5	赤色粒あり	O104
57	CFK S805	土師器	9.0	1.3	6.4	に灰い壁	ナテ	1/6	赤色粒あり 磨耗著しい	O105
58	ARX SD02	瀬戸瓦器 大目瓦	12.5			オリーブ色、黒色	輪軸(古銅) オリーブ焼、灰白、黒	口縁わずが、 外底 1/12	黒色粒あり	N83
59	ARX SD03	土師器	14.8	3.6	8.0	洗滌後、灰	洗滌後、壁	1/4	赤色粒あり 磨耗著しい	N94
60	ARX SD07	土師器	9.4	2.0	4.2	に灰い壁		1/7	口縁薄部に黒・赤色焼付痕	G254
61	ARX SD07	土師器	(14.0)			灰		口縁小片	薄縁部あり	F88
62	ARX SD07	土師器				に灰い壁		口縁小片		F82
63	ARX SD07	土師器			13.2	灰		底面 1/5	薄縁部あり	H86
64	ARX SD07	土師器	(13.4)			オリーブ色	輪軸	小片		F87
65	ARX SD08	土師器	18.8	(1.8)	(3.0)	洗滌後	ナテ	小片		O16
66	ARX SD09	土師器				灰	口縁小片	底面 1/4		N89
67	ARX SD09	土師器			11.0	灰	口縁小片	底面 1/4		N90
68	D・EIX SD12	瀬戸瓦器 入りか	9.5			洗滌後	口縁小片			F70
69	D・EIX SD12	瀬戸瓦器 入りか			(11.2)	に灰い壁	底面 1/3			F69
70	D・EIX SD12	瀬戸瓦器 入りか	8.7	2.1	3.7	灰白	輪軸(古銅)	1/6	含有物あり(130中～後期) 磨耗あり	H98
71	CFK P04	土師器	(8.4)	(1.3)	(3.0)	洗滌後	ヨコナテ	小片	内外面に炭化粉付着 口縁部に薄付痕	O108
72	CFK P08	土師器	(15.0)	(2.8)	(9.5)	灰	ヨコナテ、ナテ	1/9	赤色粒あり	O13
73	CFK P05	土師器	(29.3)			灰白	ヨコナテ	口縁小片	薄縁部あり	O109
74	RIX 包含層	土師器	6.8	1.9	5.0	灰	ヨコナテ	1/4		H51
75	RIX 包含層	土師器	8.8	1.1	7.2	に灰い壁	ヨコナテ	1/7	赤色粒あり	G258
76	RIX 包含層	瀬戸瓦器 入りか	(10.8)			オリーブ色	輪軸	口縁小片		F446
77	RIX 包含層	瀬戸瓦器 入りか			4.6	灰白	底面 1/2			H061
78	RIX 包含層	瀬戸瓦器 入りか	1.25	2.0		に灰い壁	底面 1/2			H55
79	RIX 包含層	瀬戸瓦器 入りか	9.0	4.7	8.0	オリーブ色、灰白	輪軸(古銅)	1/3		H50
80	RIX 包含層	瀬戸瓦器 入りか			(25.0)	に灰い壁	底面 1/8			H53

出土石製品観察表

発掘 番号	遺物 名称	形状	最大径			質量 (g)	石材	備考	発掘 番号
			最大径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 (cm)				
81	B区 包含層	砥石	5.8	4.6	1.5	55.0			H122
82	D区 包含層～前部	砥石	4.3	3.5	0.6	3.0			H124

## 第5章 第19次調査

### 第1節 発掘・整理作業の経過

第19次調査は、都市計画道路建設に先立つ調査であり、平成17年7月6日に着手し、同年11月23日に現地における作業を終了している。調査面積は2,506㎡である。なお、発掘調査報告は平成17年5月24日付教文第57号にて提出している。

調査着手当初は、予定地の北側部分に蓄薇園のハウスが残っていたため、南側から順に北へ延伸していく方法で進めた。調査区を設定した後、遺構上面までの表土を除去し、7月14日より人力による遺構検出作業を開始した。作業の内容は発掘作業員による遺構掘削や調査員による記録作業及び調査区内の遺構写真撮影などである。途中、作業の進捗状況にあわせて現道や水路などの区切りごとに空中写真測量を実施した。撮影した回数は延べ3回である。

出土品の整理作業は、平成21年度に行った。内容は、出土品の洗浄と記名・分類・接合及び実測作業であり、一貫して1名の整理作業員が担当した。並行して現地で作成した記録図や図面編集、出土品の写真撮影及び原稿執筆等を行い平成24年3月30日までにすべての作業を終了した。

### 第2節 調査の方法

調査の方法は、現状により調査区中ほどを東西に伸びる現道を境にその南側及び北側と、水路で区画された蓄薇園のハウス部分の大きく3か所に区分して行った。重機で遺構上面までの表土を慎重に除去した後、作業員による包含層の掘り下げ及び遺構検出を行い、並行して1/100の遺構略測図を作成した。遺構検出時に、当該地(特に北側)には相当規模の掘立柱建物が存在することが判明していたため、建物の全体像を把握した上で柱穴の半截方向を確認しながら掘削を進めた。その他、それぞれの遺構についても必要に応じて土層断面を確認しながら調査を行った。

### 第3節 遺構

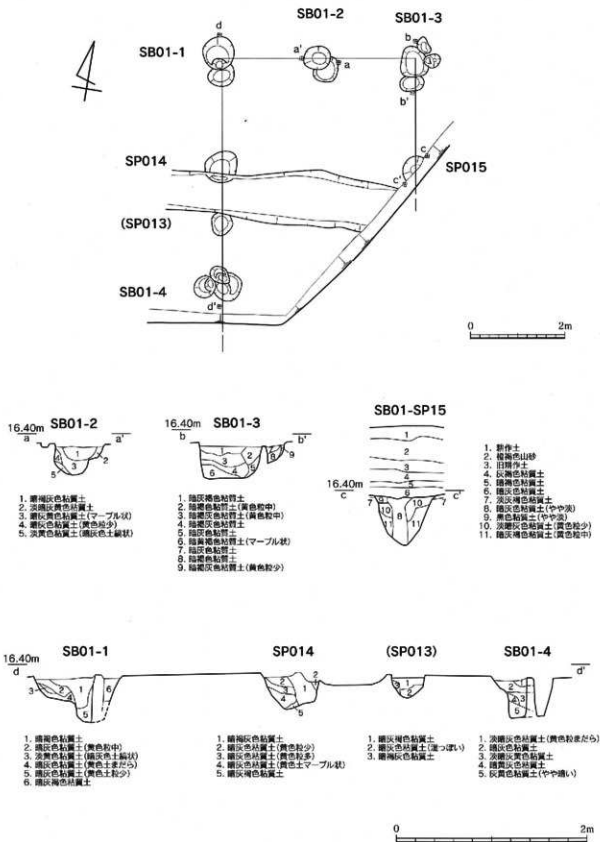
今次の調査区は、南側の中世段階の土坑や性格不明遺構が多く確認されており、中央部分には性格不詳の小穴群が集中している。また、古代の掘立柱建物群は北側に集中して展開する傾向がみられ、その方位軸も西へ20～26度程度大きく振れており、周辺で確認されている同時代の建物と比較してもその振れ幅が大ききことが特色である。その他、紙数の制限もあるため個別の詳細については遺構観察表(第4～5表)を参照していただきたい。

### 第4節 遺物

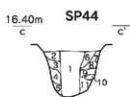
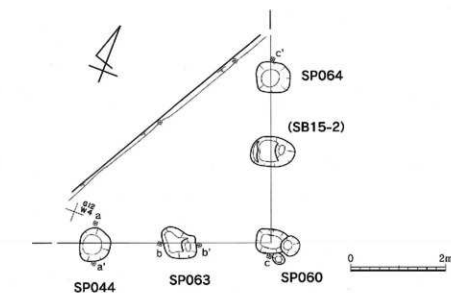
代表的なもの81点を掲載した(第33～36図)。掘立柱建物群が多く展開する北側調査区から出土したものが多く、南側の中世期の遺構から出土したものは小片がほとんどであり、その量も少ない。概ね9世紀後半代のもので占められており、建物群の時期を知る上で有効な資料である。詳細は遺物観察表(第6表)を参照していただきたい。

### 第5節 小結

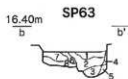
今次の調査で特徴的なものは、2×7(8)間の大型建物SB-09である。前述したとおり建物の方位軸は西へ26度と大きく振れており、その向きは平成14～18年度にかけて確認された古代北陸道にほぼ直行しており、その性格が注目されるが、最も長く古代北陸道が確認された調査区(平成16年度・第9・10次調査-南東方向へ約150m)との間には国道8号が走っており、また周辺の民地についても調査が実施されていない部分が多く残されている。墨書土器などの有効な資料が確認されていない現状では、確証は持てないが9世紀前半代から10世紀初頭にかけて廃止された石川郡内の駅家である可能性も考えておきたい。



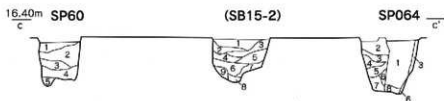
第20図 SB01(平面図S=1/80、断面図S=1/40)



1. 暗褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土(まだら)
3. 暗褐色粘質土(マール状)
4. 淡黄色粘質土(黄土土まじり)
5. 暗灰色粘質土(黄土色少)
6. 淡黄色粘質土(マール状)
7. 淡黄色粘質土(マール状)
8. 淡黄色粘質土(マール状)
9. 淡黄色粘質土(マール状)
10. 暗灰色粘質土
11. 暗灰色粘質土(黄土色少)



1. 暗褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土(黄土色少)
3. 黒色粘質土(黄土色少)
4. 淡褐色粘質土
5. 暗灰色粘質土(黄土ブロック)
6. 灰白色粘土
7. 淡褐色粘質土(黄土色少)
8. 暗褐色粘質土



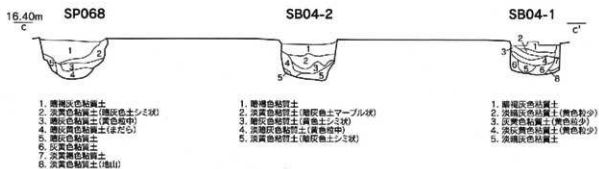
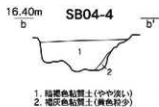
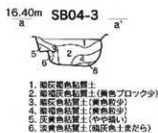
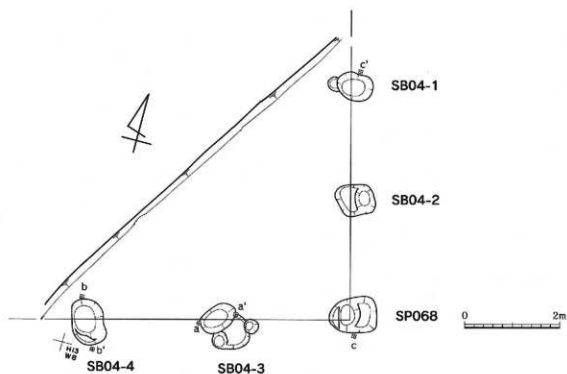
1. 暗灰色粘質土
2. 淡褐色粘質土(黄土色中)
3. 暗褐色粘質土(マール状)
4. 淡褐色粘質土
5. 淡黄色粘質土(暗灰色シミ状)

1. 暗褐色粘質土
2. 淡褐色粘質土(黄土色少)
3. 暗褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土(マール状)
5. 淡褐色粘質土(黄土色少)
6. 暗褐色粘質土(まだら)
7. 淡黄色粘質土(黄土シミ状)
8. 暗褐色粘質土
9. 淡黄色粘質土(黄土シミ状)

1. 暗褐色粘質土
2. 淡褐色粘質土(マール状)
3. 暗褐色粘質土(黄土色少)
4. 暗褐色粘質土(黄土ブロック)
5. 暗褐色粘質土(黄土色少)
6. 暗褐色粘質土(黄土ブロック)
7. 暗褐色粘質土(マール状)
8. 暗褐色粘質土(黄土シミ状)

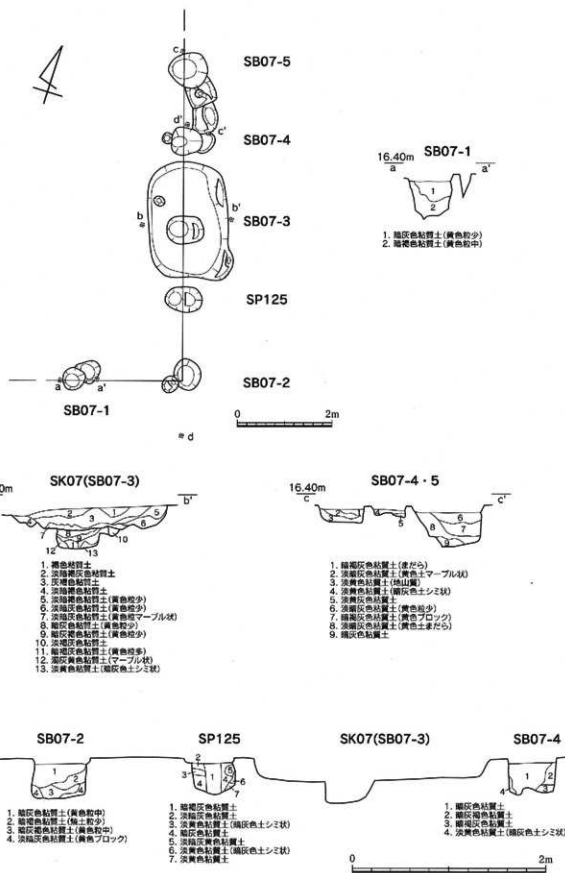


第21図 SB03(平面図S=1/80、断面図S=1/40)

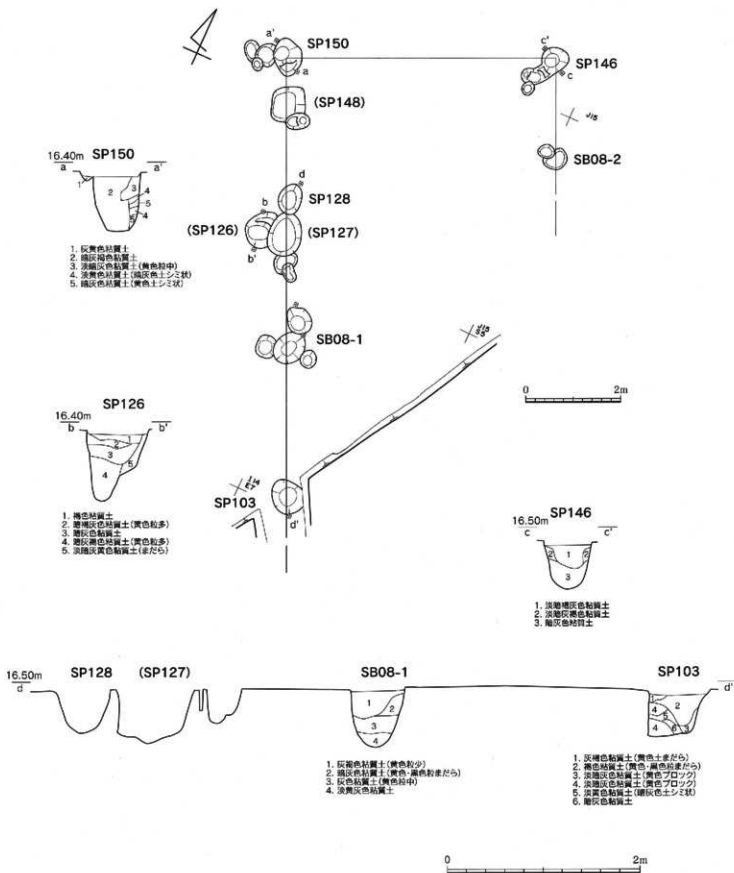


第22図 SB04(平面図S=1/80、断面図S=1/40)

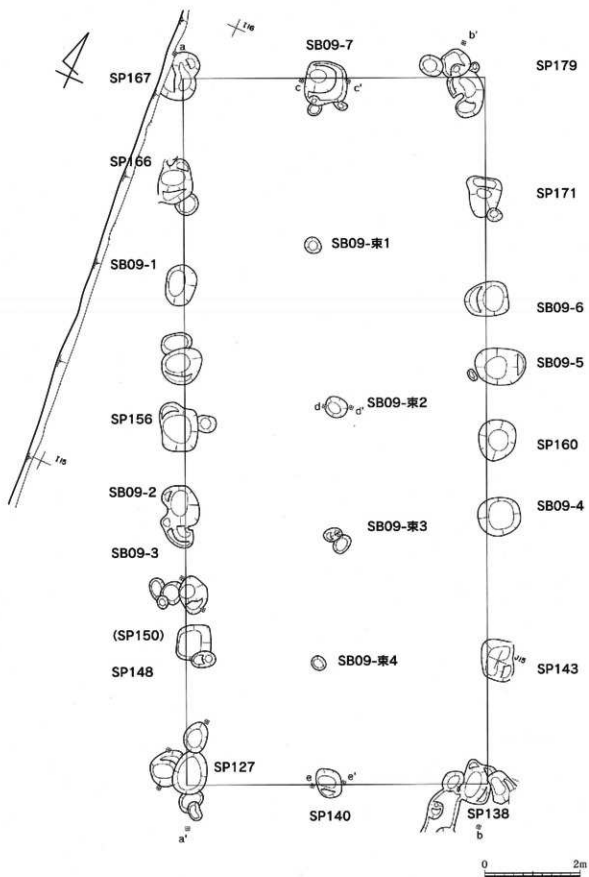




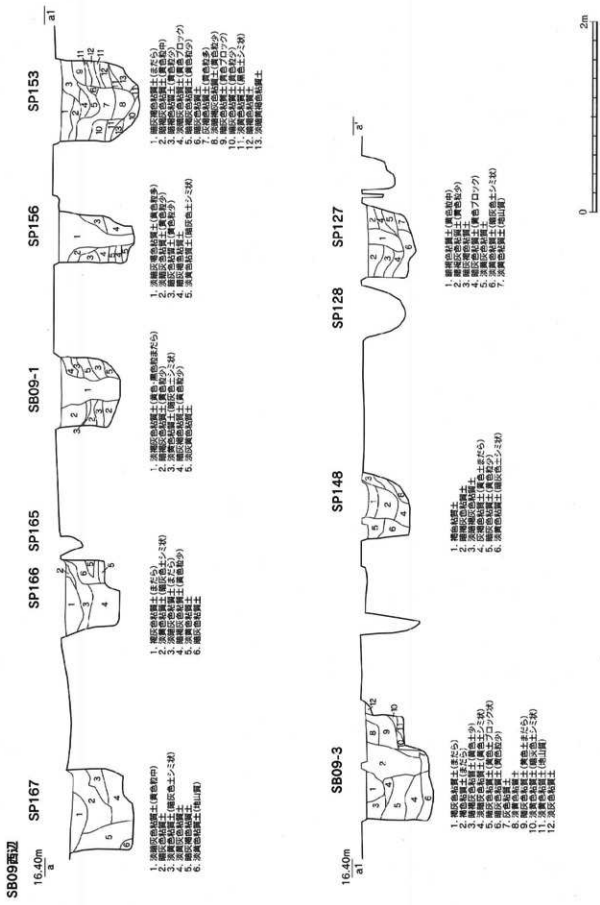
第23図 SB07(平面図S=1/80、断面図S=1/40)



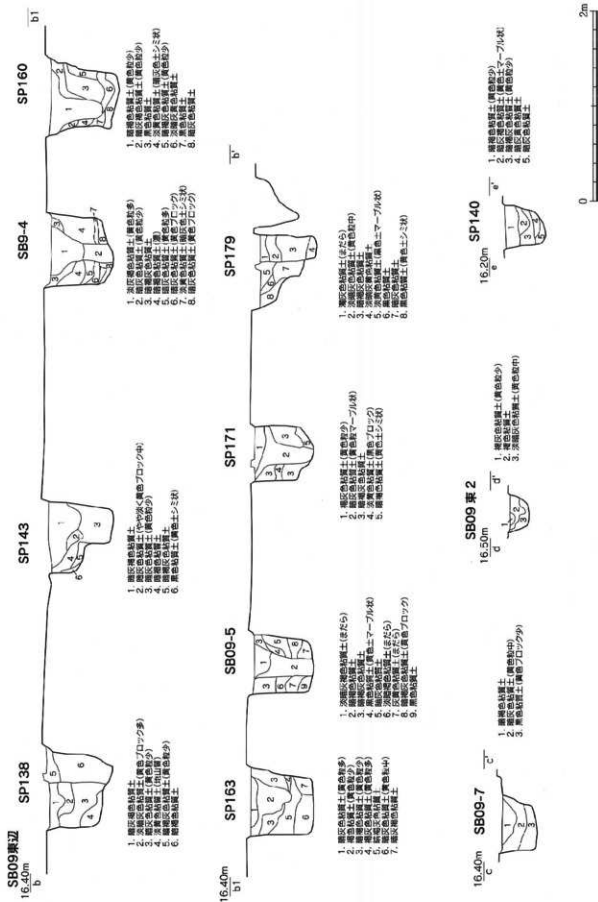
第24図 SB08(平面図S=1/80、断面図S=1/40)



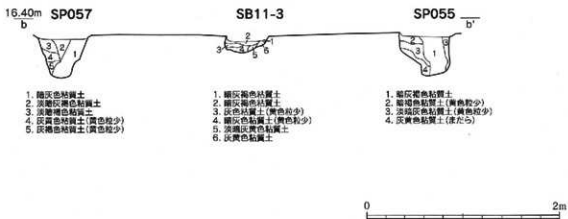
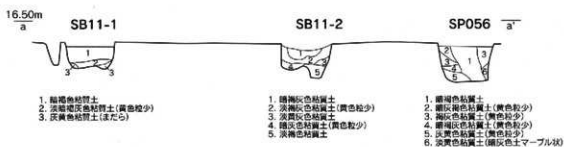
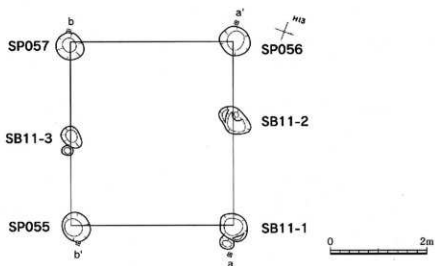
第25図 SB09(平面図S=1/80)



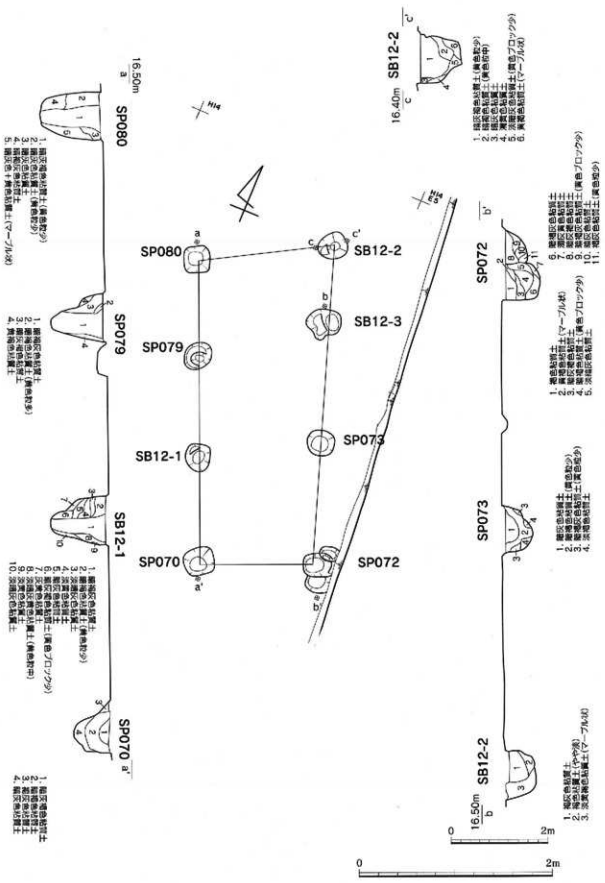
第26图 SB09西辺断面图(断面图S=1/40)



第27図 SB09東辺ほか断面図(S=1/40)



第28図 SB11(平面図S=1/80、断面図S=1/40)



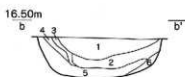
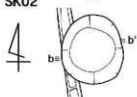
第29図 SB12(平面図S=1/80、断面図S=1/40)

SK01



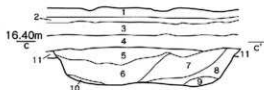
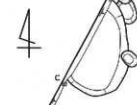
1. 暗灰色粘質土
2. 暗褐色粘質土(やや濃い)
3. 暗褐色粘質土(黄色粘中)
4. 暗灰色粘質土

SK02



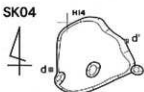
1. 灰褐色粘質土
2. 黄灰色粘質土
3. 灰色粘質土(やや暗く黄色ブロック)
4. 暗褐色粘質土(やや濃い)
5. 淡褐色粘質土(黄色粘少)
6. 淡褐色粘質土(まだら)

SK03



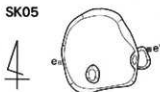
1. 新作土
2. 灰土
3. 淡灰褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 暗褐色粘質土(黄色粘少)
6. 暗褐色粘質土(黄色粘中)
7. 暗褐色粘質土(黄色粘多)
8. 暗灰色粘質土
9. 黒色粘質土
10. 淡灰黄色粘質土
11. 褐色粘質土

SK04



1. 暗灰色粘質土
2. 淡褐色粘質土(黄色粘少)
3. 灰黄色粘質土

SK05



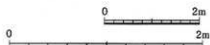
1. 淡褐色粘質土(黄色粘少)
2. 淡褐色粘質土(黄色粘少)
3. 褐色粘質土
4. 灰色粘質土(黄色粘少)
5. 褐色粘質土(マール状)
6. 灰色粘質土(黄色粘少)
7. 淡黄色粘質土(地山層)
8. 灰色粘質土(黄色粘少)
9. 淡灰黄色粘質土



SK09



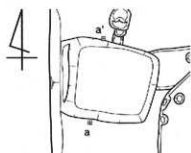
1. 暗灰色粘質土
2. 暗褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土(やや暗く黄色粘多)
4. 暗灰色粘質土
5. 淡褐色粘質土
6. 淡灰黄色粘質土



第30図 SK01~05・09(平面図S=1/80、断面図S=1/40)



SX01

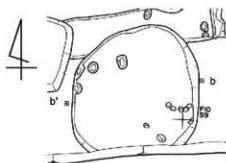


16.50m  
a



1. 薄褐色粘質土
2. 反褐色粘質土
3. 褐色粘質土
4. 淡褐色粘質土
5. 薄褐色粘質土
6. 薄淡黄色粘質土

SX02

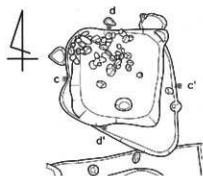


16.50m  
b

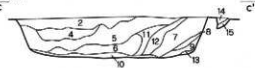


1. 灰色弱粘質土(黄色粒少)
2. 灰白粘質土
3. 褐色粘質土(やや強い)
4. 灰褐色粘質土(黄色粒多)

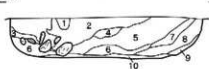
SX03



16.50m  
c



16.50m  
d



1. 灰色粘土
2. 反黄色粘質土(マール状)
3. 反黄色粘質土(陶灰ブロック)
4. 黄灰色粘質土(マール状)
5. 反黄色粘質土
6. 灰色粘質土(奥帯で黄色ブロック)
7. 褐色粘質土(黄色粒少)
8. 褐色粘質土(黄色ブロック中)
9. 淡褐色粘質土(湿っぽい, 黄色粒少)
10. 褐色粘質土(やや強い, 湿っぽい)
11. 灰色粘質土(黄色粒少)
12. 褐色粘質土(黄色土塊状)
13. 反黄色粘土
14. 淡褐色粘質土(まだら)
15. 薄淡黄色粘質土

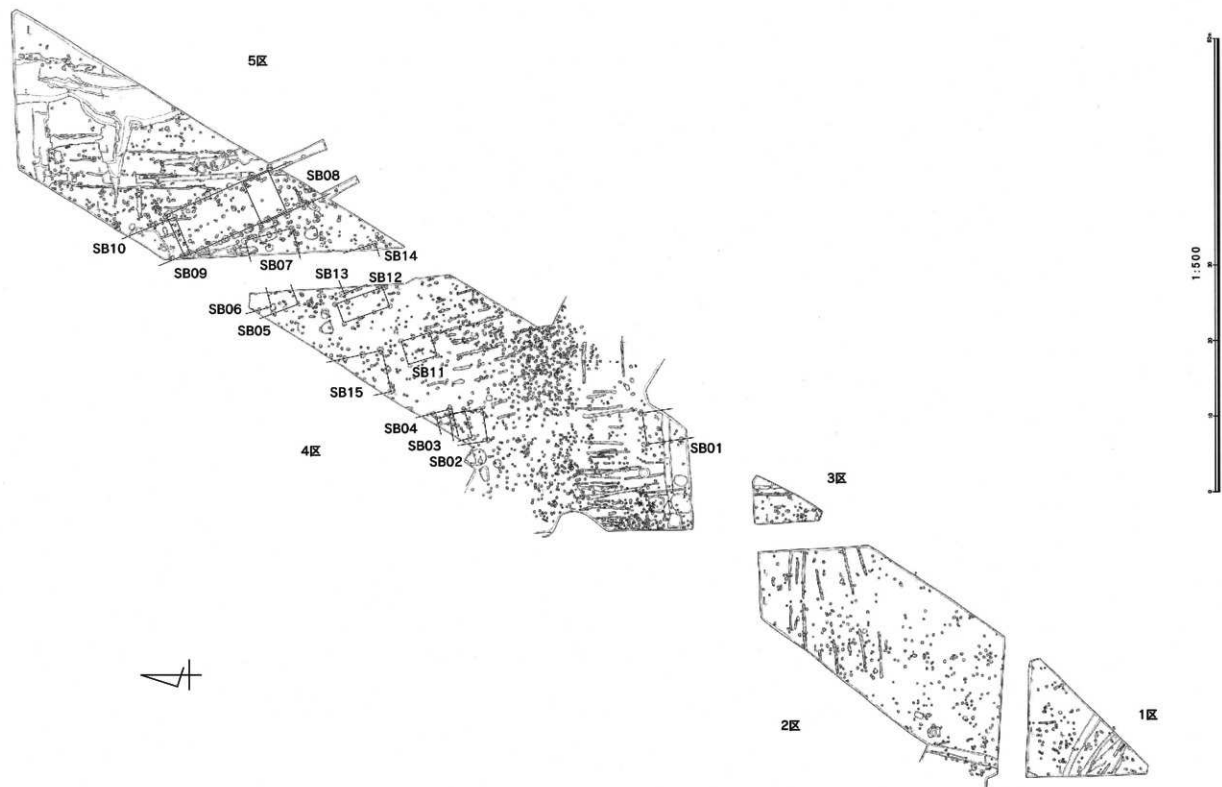
※東側壁から埋められている。

0 2m

0 2m

第31図 SX01~03(平面図S=1/80、断面図S=1/40)





第32図 遺構全体図(S=1/500)

第4表 堀立柱建物一覧表1

建物	アトリック	軸	瓦軸 cm	瓦軸 cm	壁	桁	構造SP	瓦経 cm	瓦経 cm	深度 cm	セクションNo	建物組成書行	その他			
SB01	F~G9	N-11°-W	550+	400	2+	2	SB01-1	72	68	32	GE					
							SP14	68	65	29				切り合い		
							SB01-4	60	58	40				切り合い		
							SP15	50	28	25				GH	調査区外	
							SD01-2	60	51	39				CF		
							SB01-3	67	58	37				CG	切り合い	
SB02	F~G12	N-16°-W	430+	380+	2+	2+	SP65	70	63	24	FU					
							SP66	58	55	32				切り合い		
							SP91	63	38	27				PW		
							SB02-1	50	115	23					調査区外	
							SP64	68	65	66				FT	切り合い	
SB15-2	95	65	42													
SP60	68	50	43	切り合い												
SP63	67	65	33	FS												
SP44	71	65	64	FR												
SB04	G13	N-14°-W	500+	500	2+	2	SP68	101	75	49	Fc	MA19-016				
							SB04-1	75	54	39				切り合い		
							SB04-2	79	67	49						
							SB04-3	80	53	38				Fb	切り合い	
							SB04-4	95	67	41				Es		
							SP66	76	57	67				Fl		
SB06	H14	N-25°-W	490+	?	2+	?	SB05-1	65	51	39	Fj					
							SB05-2	42	42	38				切り合い		
							SP99	37	009	15				無		調査区外
							SP98	85	73	18						
							SB06-1	77	009	20						
SB06-2	48	36	35													
SB06-3	36	31	37													
SB07	H14~15	N-20°-W	600	330+	4	1+	SP125	77	53	58	CP					
							SB07-1	48	47	48				DM	切り合い	
							SB07-2	78	060	56				CP	切り合い	
							SB07-3	78	90	40				RE	SB07と重複	
							SB07-4	66	62	52				CP	切り合い	
							SB07-5	82	76	35				(D.LINE/F.P)	切り合い	
SB08	I~J14~15	N-35°-W	940	580	3	1	SP100	76	63	67	CR	MA19-017	調査区外			
							SP128	689	49	81				CU	切り合い	
							SP150	83	60	53				CS	切り合い	
							SP146	57	51	59				DI	MA19-018	切り合い
							SB08-1	75	61	76				CR	切り合い	
							SB08-2	47	(47)	42					切り合い	
							SP157	105	-8	65				CR	MA19-023	調査区外
							SP166	70	67	68						切り合い
							SP156	83	78	102						
							SP148	75	71	85						切り合い
SP127	88	70	84	切り合い												
SP149	64	31	58	CX												
SP138	79	65	84	DG	MA19-019・20	切り合い										
SP143	92	67	91	DG	MA19-021	切り合い										
SP160	67	77	81		MA19-064											
SP171	89	71	74	DG	切り合い											
SP179	56	69	77	DG	切り合い											
SB08-1	97	64	75													
SB08-2	92	75	106		切り合い											
SB08-3	88	75	83		切り合い											
SB08-4	88	82	89	DG												
SB08-5	107	77	82	DG	切り合い											
SB08-6	91	75	64	DG												
SB08-7	90	89	89	DH	切り合い											
東1	37	35	42													
東2	46	43	29	DJ												
東3	44	30	17		切り合い											
東4	32	30	18													

第4表 堀立柱建物一覧表2

建群	グリッド	軸	柱間 幅 m	柱間 幅 m	階 数	形	構成SP	柱径 mm	柱径 mm	実高 mm	マクシムム%	建物科番番号	その他
SR00	I→H16→H	N-25'-W	800+	530	3+	1	SP165	49	133	36	CR	MA19-025	切り合い
							SP169	55	48	37			
							SP168	65	59	60			
							SP182	71	43	34			
							SP187	689	88	42	RR	MA19-026	切り合い SB03と重複
							SB10-1	51	140	21			調査区外
							SB10-2	65	61	25	CR		
SB11	G→H12	N-20'-W	390	390	2	1	SP95	65	35	47	PV	MA19-027	
							SP57	65	38	43			
							SP96	62	35	44	PZ		
							SB11-1	65	55	40			
							SB11-2	76	56	37			
							SB11-3	55	34	22			
							SP70	65	59	38	E4		
SB12	H13	N-24'-W	650	290	3	1	SP79	65	57	63			
							SP80	55	56	57			
							SB12-1	62	57	66			
							SB12-2	64	55	53	E6		
							SP72	660	49	39	E7		調査区外
							SP73	58	56	29			
							SB12-3	74	58	29			
SB13	H13	N-20'-W	260+	?	1+	?	SP74	58	147	71	E8		調査区外
							SP75	77	59	59			切り合い
SB14	H13	N-20'-W	290+	?	1+	?	SP76	605	65	87	E9		切り合い
SB15	F→G11→E12	N-10'-W	400+	430+	1+	1+	SP101	68	51	19	無		切り合い
							SP15-1	75	55	14			切り合い
							SP15-2	83	65	67			

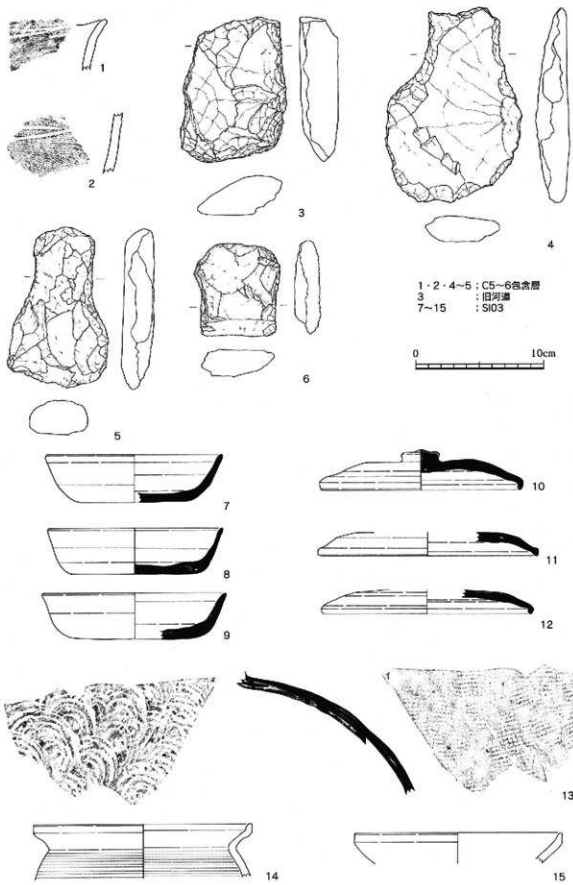
第5表 堀立柱建物一柱間寸法1

1F→30.3m

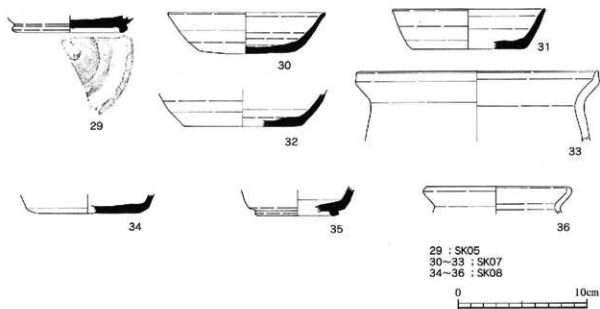
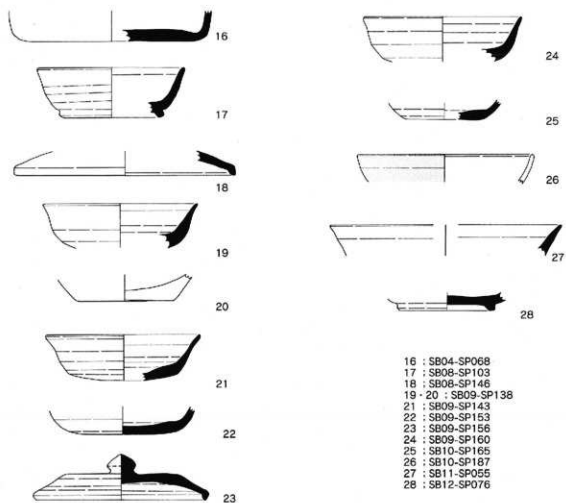
堀立柱建物	柱	柱間 幅 mm	尺	その他
SB01N-S	SB01-1とSP11	230	7.25	
	SP14とSB01-4	260	8.58	
SB01W-E	SB01-3とSP15	230	7.59	SP15は調査区外
	SB01-1とSB01-2	210	6.93	
	SB01-2とSB01-3	190	6.27	
SB02N-S	SP69とSP66	230	7.59	
SB02W-E	SB02-1とSP91	215	7.10	SB02-1は調査区外
	SP91とSP66	225	7.43	
SB03N-S	SP94とSB15-2	160	5.28	
SB03W-E	SB15-2とSP69	190	6.27	
	SP44とSP63	200	6.60	
	SP63とSP60	180	5.94	
SB04N-S	SB04-1とSB04-2	225	7.43	
SB04W-E	SB04-2とSP68	250	8.25	
	SB04-1とSB04-3	275	9.06	
	SB04-3とSP68	270	8.91	
SB05N-S	SD05-1とSP66	170	5.61	
SB06N-S	SP66とSB05-2	185	6.11	
	SB06-1とSP68	229	7.26	SB06-1は調査区外
	SB06-2とSB06-3	95	3.14	
	SD06-3とSD06-4	185	6.11	
SB06W-E	SB06-4とSP69	190	5.28	SP69は調査区外
SB07N-S	SB07-6とSB07-4	135	5.12	
	SB07-4とSB07-3	185	6.11	
	SB07-3とSP125	130	4.96	
SB07W-E	SP125とSD07-2	160	5.28	
	SP107-1とSB07-2	245	8.09	
SB08N-S	SP150とSP128	312	10.30	
	SP128とSB08-1	313	10.33	
	SD08-1とSP103	310	10.23	
	SP148とSB08-2	210	6.93	
SB08W-E	SP150とSP148	500	16.48	

第5表 堀立柱建物一柱間寸法2

掘立柱建物	柱	柱間 ca	尺	その他
SD00N-S	SP167とSP166	200	6.60	SP167は調査区外
	SP166とSB09-1	225	7.43	
	SB00-1とSP156	175	5.78	
	SP156とSD09-2	140	4.62	
	SD09-2とSD09-3	160	5.28	
	SB09-3とSP148	300	9.90	
	SP148とSP127	220	8.91	
	SP127とSP171	210	6.63	
	SP171とSB09-5	220	7.26	
	SB09-6とSB09-5	150	4.95	
	SB09-6とSP160	150	4.95	
	SP160とSD09-4	160	5.28	
	SD09-4とSP143	310	10.23	
	SP143とSP138	360	9.34	
SB00中央	SB09-7と棟1	365	12.05	
	棟1と棟2	325	10.73	
	棟2と棟3	290	9.57	
	棟3と棟4	260	8.58	
SD09W-E	棟4とSP140	244	8.05	
	SP157とSD09-7	290	9.57	
	SD09-7とSP129	310	10.23	
	SP140とSP128	310	10.23	
SB10N-S	SP127とSP140	290	9.57	
	SP187とSP182	250	8.25	
	SP182とSP168	260	8.58	
	SP168とSP169	180	5.91	
SB10-E	SB10-1とSB10-2	240	7.92	SB10-1は調査区外
	SB10-2とSP166	180	5.94	
	SP165とSP169	520	17.16	
SB11N-S	SP97とSB11-3	200	6.60	
	SB11-3とSP95	190	6.27	
	SP95とSB11-2	190	6.27	
SB11W-E	SB11-2とSB11-1	240	7.92	
	SP97とSP96	330	11.85	
	SP95とSB11-1	340	11.22	
SD12N-S	SP80とSP79	215	7.10	
	SP79とSB12-1	210	6.93	
	SB12-1とSP70	225	7.43	
	SB12-2とSB12-3	160	5.28	
	SD12-3とSP73	260	8.58	
SB12W-E	SP73とSP72	260	8.58	SP72は調査区外
	SP80とSB12-2	290	9.57	
	SP70とSP72	240	7.92	
SD13N-S	SP93とSB13-1	180	5.94	
SB14#	SP75とSP74	170	5.61	SP74は調査区外
SB14#	SP76とSB14-1	180	5.94	
SB19W-E	SP41とSB15-1	430	14.19	
SB15N-S	SB15-1とSB15-2	400	13.20	

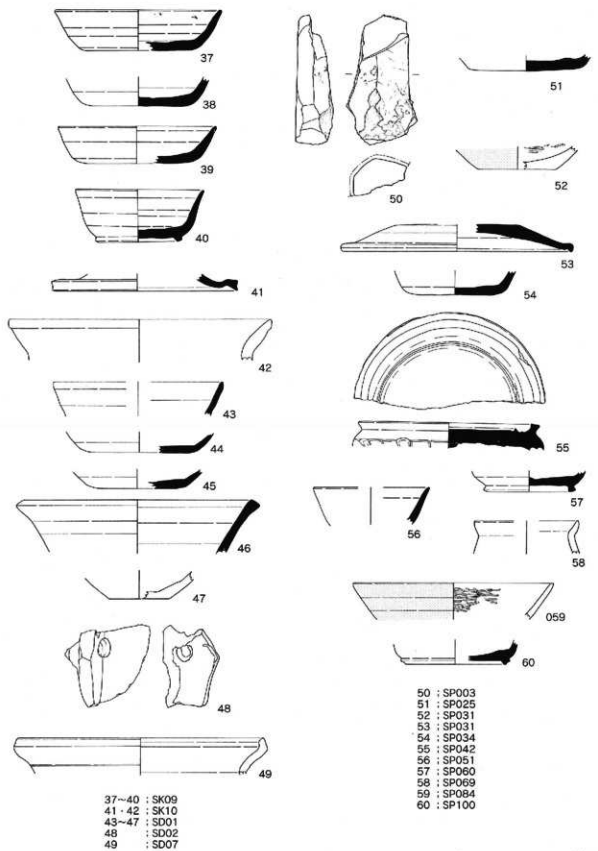


第33圖 出土遺物実測図1 (S=1/3)

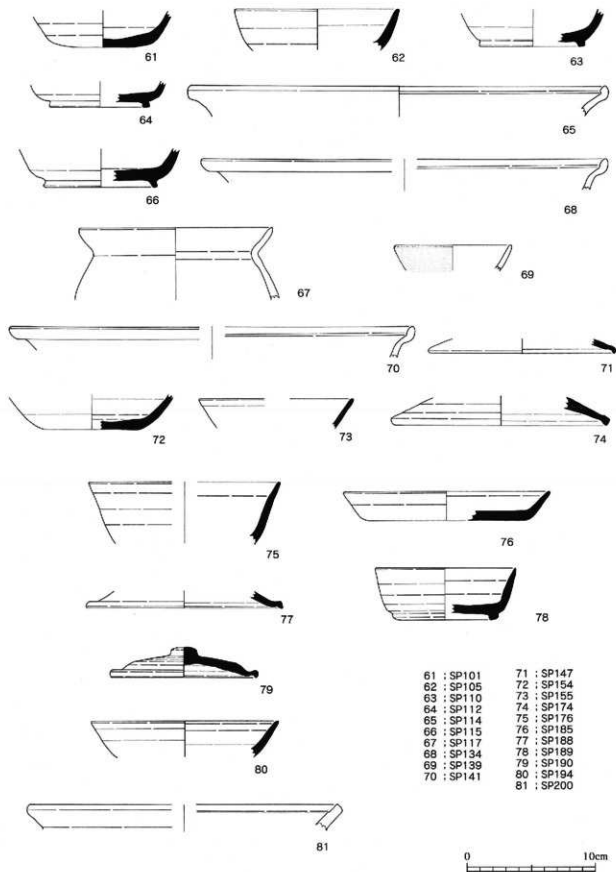


第34图 出土遺物実測図 2 (S=1/3)





第35図 出土遺物実測図 3 (S=1/3)



第36图 出土器物实测图4 (S=1/3)

第6表 出土遺物観察表1

番号	種別	部材	出土地点	口径	底径	器高	通径	外径調整	内径調整	外面色調	内面色調	胎土	器種	備考
1	縄文土器	杯蓋	C5-6包合群							7.5YR4/2	7.5YR3/1	M2, S3	M143	
2	縄文土器	杯蓋	C5-6包合群							7.5YR4/2	10YR6/3	M2, S3	M144	
3	石製器	打製石斧	煎餅河	最大長105、幅80、厚30mm、重355g									M145	火山噴出物
4	石製器	打製石斧	C5-6包合群	最大長151、幅105、厚27mm、重590g									M145	火山噴出物
5	石製器	打製石斧	C5-6包合群	最大長128、幅78、厚27mm、重317g									M146	輝石安山岩
6	石製器	打製石斧	C5-6包合群	最大長73、幅65、厚13mm、重139.6g									M147	緑色凝灰岩
7	須恵部	杯A	SK3	139	85	38	3/5	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	10YR8/2	10YR8/2	M1	M201	
8	須恵部	杯A	SK3	138	99	37	3/4	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	5Y7/1	5Y7/1	M2, S3	M202	
9	須恵部	杯A	SK3	145	96	37	小片	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	2.5Y7/1	2.5Y6/1		M204	
10	須恵部	杯蓋	SK3	158		32	3/5	口口口口口	口口口口口	5Y8/1	5Y6/1	M1, S2	M206	
11	須恵部	杯蓋	SK3	173			小片	口口口口口	口口口口口	N6/0	N6/0	S3	M202	
12	須恵部	杯蓋	SK3	164			小片	口口口口口	口口口口口	2.5Y6/1	10YR7/1	M1, S2	M207	
13	須恵部	壺底	SK3				小片	平行タタキ	同心円タタキ	N6/0	N6/0	S3	M208	
14	土師部	瓦製埴輪	SK3	173			1/7	弁形口	弁形口	5YR7/6	5YR7/4	S2	M209	
15	土師部	瓦製埴輪	SK3	163			1/6	口口口口口	口口口口口	5YR8/4	5YR8/4	S2	M210	
16	須恵部		SDM-SP068			132	1/4	口口口口口	口口口口口	5Y5/1	N7/0	M2	M131	
17	須恵部	杯蓋	SK06-SP103	115	82	40	1/5	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	5Y6/1	5Y6/1	M1, S2	M200	
18	須恵部	杯蓋	SK06-SP146	175			小片	口口口口口	口口口口口	2.5Y6/1	2.5Y7/1		M209	
19	須恵部	杯	SK06-SP136	121			1/8	口口口口口	口口口口口	5Y8/1	5Y7/1		M205	
20	十摩部	杯A	SK06-SP138			75	3/5	口口口口口、底面盛り	口口口口口	10YR4/4	10YR8/3		M204	
21	須恵部	杯A	SK06-SP143	122			1/6	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	2.5Y8/2	2.5Y8/2		M207	
22	須恵部	杯A	SK06-SP150			86	1/4	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	7.5Y7/1	7.5Y7/1	S2	M209	
23	須恵部	杯蓋	SK06-SP156	133			3/8	口口口口口	口口口口口	N6/0	N6/0		M206	
24	須恵部	杯	SK06-SP160	124			1/5	口口口口口	口口口口口	N6/0	N6/0	M2, S3	M203	
25	須恵部	杯A	SK10-SP165			58	1/2	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	5Y8/1	5Y8/1	S2	M241	
26	土師部	甕	SK10-SP187	138			小片	口口口口口	口口口口口	2.5Y7/5	2.5Y8/6		M247	内尻非直
27	須恵部	甕	SK11-SP255	182			小片	口口口口口	口口口口口	2.5Y8/1	2.5Y8/1	S3	M219	
28	須恵部	杯蓋	SK12?-SP208			78	1/2	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	2.5Y7/1	2.5Y7/1	S1	M136	
29	須恵部	杯蓋	SK25			30	1/5	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	5Y5/1	5Y5/1	S3	M212	
30	須恵部	杯A	SK27	123			3/3	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	10YR6/1	2.5Y7/1	S3	M213	
31	須恵部	杯A	SK27	139	87	32	1/8	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	2.5Y6/1	2.5Y6/1	S2	M214	
32	須恵部	杯A	SK27			82	1/5	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	2.5Y8/2	2.5Y8/2	S1	M215	
33	土師部	瓦製埴輪	SK27	190			1/6	弁形口	弁形口	7.5YR8/3	7.5YR8/3		M216	
34	須恵部	杯A	SK28			83	1/4	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	N6/0	N6/0	S3	M217	
35	須恵部	杯B	SK28			66	1/6	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	5Y5/1	5Y5/1	S2	M218	
36	土師部	瓦製埴輪	SK28	110			弁形口	弁形口	7.5YR7/6	7.5YR4/3	S1	M219	直	
37	須恵部	杯A	SK29	131	85	33		口口口口口、底へ少切り	口口口口口	2.5Y7/1	2.5Y8/2	M1	M200	直
38	須恵部	杯A	SK29			89	4/5	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	10YR8/2	2.5Y8/2	S1	M201	
39	須恵部	杯A	SK29	124	94	30	1/4	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	N6/0	7.5Y6/1	S2	M202	
40	須恵部	杯B	SK29	102	88	41	2/3	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	N6/0	10YR6/1	L1, S3	M223	
41	須恵部	杯蓋	SK30	145			1/8	口口口口口	口口口口口	N7/6	5Y6/1	M2, S3	M204	
42	土師部	瓦製埴輪	SK30	207			小片	弁形口	弁形口	10YR8/3	10YR8/3	S1	M225	
43	須恵部	杯	SK31	133			小片	ナテ	ナテ	2.5Y8/1	2.5Y8/1	M1, S3	M130	
44	須恵部	杯A	SK31			76	1/6	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	5Y6/1	5Y6/1	M1, S3	M132	
45	須恵部	杯A	SK31			83	1/6	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	7.5Y6/1	2.5Y7/2	S3	M131	
46	須恵部	壺	SK31	182			小片	口口口口口	口口口口口	5Y7/1	5Y7/1	S2	M131	
47	土師部	杯	SK31			48	1/3	ナテ	ナテ	7.5YR7/3	10YR8/2	M2	M149	
48	須恵部	友引椀	SK32				小片	ナテ	ナテ	5Y5/1	5Y6/1	M-S3	M148	
49	土師部	瓦製埴輪	SK32	191			小片	口口口口口	口口口口口	10YR7/4	10YR6/3	S2	M133	
50	石製品	砥石	SK32	最大長101、幅52、厚133.8g									M135	
51	須恵部	杯A	SK35			90	1/2	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	2.5Y7/1	5Y7/1	S3	M125	
52	土師部	壺	SK35			60	1/4	口口口口口、底へ少切り	口口口口口、ヒラキ	5YR7/6	5YR7/1	M138	M138	内尻非直
53	須恵部	杯蓋	SK36	183			1/8	口口口口口	口口口口口	5Y7/1	10YR7/1	L1, S3	M126	
54	須恵部	杯A	SK36			69	1/4	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	5Y6/1	5Y6/1	S3	M124	
55	須恵部	内尻直	SK36				1/2			N7/0	5Y4/3	M1	M114	
56	須恵部	杯	SK36	82			小片	口口口口口	口口口口口	2.5Y8/2	2.5Y8/2	S2	M118	
57	須恵部	杯B	SK36			72	1/3	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	5Y6/1	2.5Y6/1		M123	
58	土師部	瓦製埴輪	SK36	82			小片	口口口口口	口口口口口	10YR5/3	10YR6/3	M2, S2	M116	
59	土師部	壺	SK36	158			小片	口口口口口	口口口口口、ヒラキ	5YR6/4	5Y2/1	S3	M127	内尻非直
60	須恵部	杯B	SK39			85	1/6	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	5Y5/1	5Y5/1	M1, S3	M266	
61	須恵部	杯A	SK39			86	1/3	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	2.5Y7/1	2.5Y7/1		M268	
62	須恵部	杯	SK39	192			小片	口口口口口	口口口口口	10Y7/1	N5/0	S2	M269	
63	須恵部	杯B	SK39			83	小片	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	5Y6/1	5Y6/1	S2	M269	
64	須恵部	壺	SK41				1/4	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	10Y6/1	10Y6/1	S3	M261	
65	土師部	埴輪	SK41	414			小片	口口口口口	口口口口口	10YR7/4	10YR7/3	M1, S1	M262	
66	須恵部	杯B	SK41			90	1/5	口口口口口、底へ少切り	口口口口口	N4/0	N5/0	S3	M262	

第6表 出土遺物観察表2

発掘 番号	項目	種類	出土地点	口径 mm	底径 mm	器高 mm	遺存量	片割割数	内面割数	外面色調	内面色調	出土 番号	発掘 番号
67	土師器	瓦製盤	SP117	152			1/5	磨粒	磨粒	10YR2/3	10YR2/3	M3	M327
68	土師器	坏B	SP134		77		小片	ロタロナテ、底へう切り	ロタロナテ	5Y5/1	5Y5/1	S1	M348
69	土師器	輪	SP139	92			1/7	ロタロナテ	ロタロナテ	5YR2/4	10YR2/1	S2	M351
70	土師器	輪	SP141	320			小片	ロタロナテ	ロタロナテ	5YR2/6	7.5YR7/4	S2	M352
71	土師器	坏蓋	SP147	148			小片	ロタロナテ	ロタロナテ	7.5Y6/1	7.5Y6/1	S3	M354
72	土師器	坏A	SP154		78		1/2	ロタロナテ、底へう切り	ロタロナテ	7.5Y7/1	7.5Y7/1		M340
73	土師器	坏	SP155	121			小片	ロタロナテ	ロタロナテ	10Y5/1	7.5Y6/1	S1	M343
74	土師器	坏蓋	SP174	170			1/8	ロタロナテ	ロタロナテ	2.5Y5/1	2.5Y6/1	S2	M353
75	土師器	坏	SP176				小片	ロタロナテ	ロタロナテ	N6/0	N6/0	S3	M327
76	土師器	坏A	SP185	162	125	23	1/4	ロタロナテ、底へう切り	ロタロナテ	7.5Y4/1	7.5Y5/1	S2	M326
77	土師器	坏蓋	SP188	155			小片	ロタロナテ	ロタロナテ	5Y2/1	5Y5/1	M3	M356
78	土師器	坏B	SP189	110	83	41	1/2	ロタロナテ、底へう切り	ロタロナテ	N6/0	N6/0	S3	M342
79	土師器	坏蓋	SP190	115	24		1/8	ロタロナテ	ロタロナテ	7.5Y6/2	7.5Y6/1	S2	M355
80	土師器	坏	SP194	148			小片	ロタロナテ	ロタロナテ	7.5Y5/1	7.5Y6/1		M344
81	土師器	瓦製茶	SP200	252			小片	赤千日	赤千日	10YR7/4	10YR7/4	S1	M345

注記 表裏の数字は遺存量の項目に「定」とない場合はすべて数元値である  
 遺存量に示した数字は、発掘面に残された範囲内での量を示すものであり、器物全体に対するものではない  
 割数「ロタロナテ式」では、ロタナテを1つのもみずきを行っていることを示す  
 併記の場合は同一断面で割数が異なる場所があることを示す  
 色調 「新製標準土色図」に準拠  
 断上 アルフベットは断片の長さ、S(径1mm以下)M(径1～3mm)L(径3mm以上)  
 断面は断片の厚さ、0(ほとんど含まない)1(少量含む)2(やや多い)3(多い)  
 断面図・土師器の断片は小笠原教育委員会2007～2009「新製標準土色図」を参考にした



調査地遠景(北西から)



A・B区全景



2

3

4

1



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15





A区 全景(北西から)



B・C・D・E区全景(北東から)



B区 SI01完掘状況(南西から)



C区 SI04完掘状況(東から)



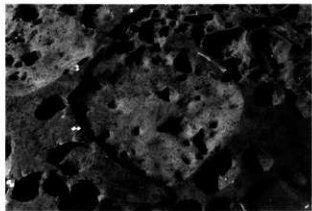
C区 SI02完掘状況(南東から)



C区 SI05完掘状況(東から)

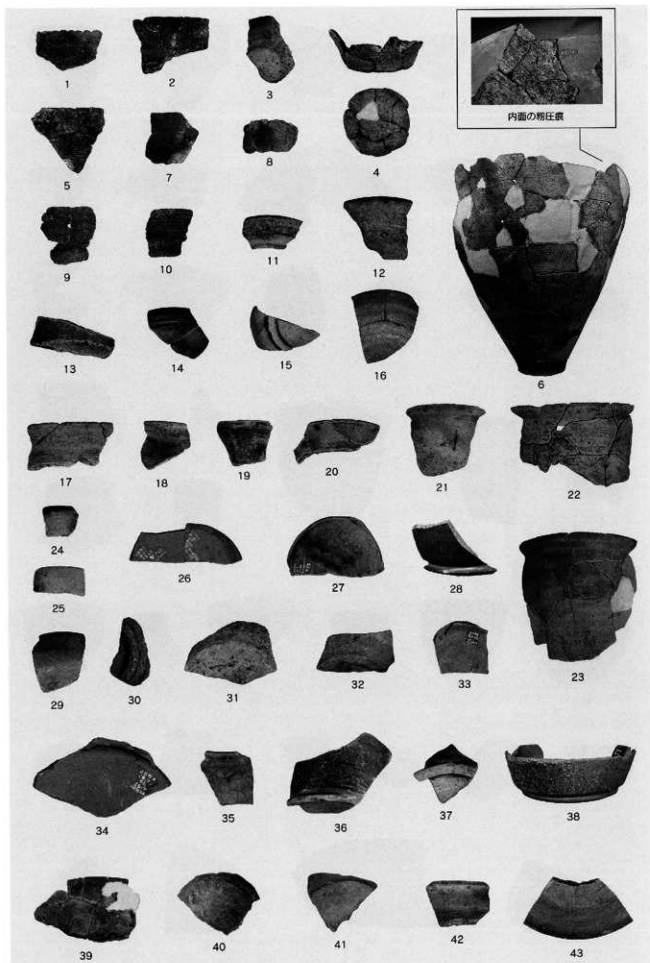


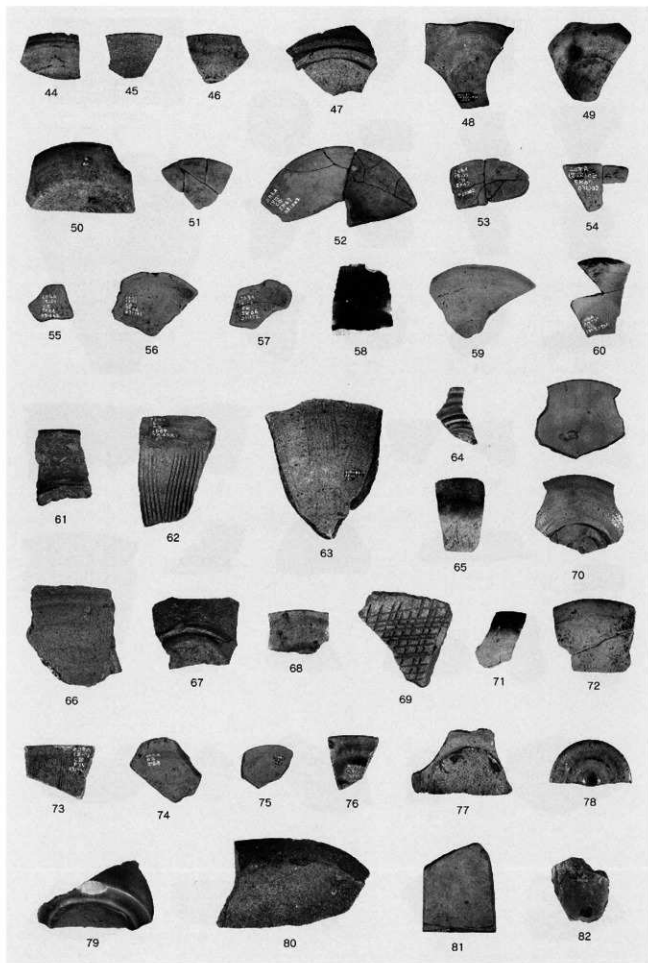
A区 SB03・SI03完掘状況(南から)



C区 SK05完掘状況(南東から)









1～3区全景(上空から、上が南東)



1～3区全景(南西から)



4区全景(上空から、上が北西)



4区獨立柱建物群(上空から、上が北)



5区全景(北東から)



5区SB09(上空から、上が南西)



5区SB09(南東から)



1区完振状況(北から)



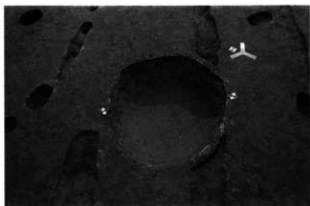
3区完掘状況(北から)



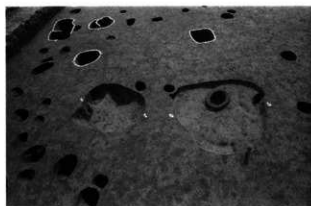
4区SB02~04(南東から)



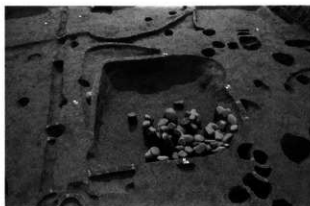
4区SB12(北西から)



4区SK02(北から)



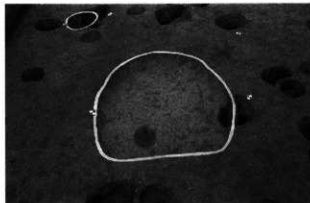
4区SK04(北から)



4区SX03(北から)



4区南半完掘状況(北から)



5区SK05(南から)



1



13



2



14



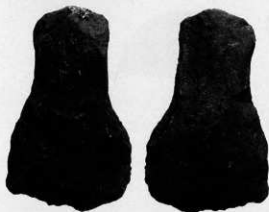
17



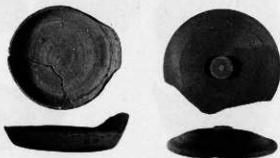
4



21



5



8



10



23



30



33



38



37



52



53



55



40



59



48



67

## 報告書抄録

ふりがな	みっかいちAいせき							
書名	三日市A遺跡3							
副書名								
シリーズ名	野々市市北西部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	4							
編著者名	横山 貴広 徳野 裕子							
編集機関	野々市市教育委員会							
所在地	〒921-8510 石川県野々市市三納一丁目1番地 Ⅷ.076-227-6122							
発行年月日	2012年3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
三日市A遺跡 第2次調査	石川県野々市市 三日市町	17344		36° 32' 06"	136° 35' 45"	第2次 20021015～ 20021225	第2次 2,200㎡	記録保存調査
三日市A遺跡 第8次調査	石川県野々市市 三日市町	17344		36° 32' 17"	136° 35' 54"	第8次 20050407～ 20051007	第8次 3,300㎡	記録保存調査
三日市A遺跡 第19次調査	石川県野々市市 三日市町	17344		36° 32' 11"	136° 35' 50"	第19次 20050706～ 20051123	第19次 2,506㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
三日市A遺跡 第2次調査	集落	古代・近世	掘立柱建物、溝		土師器、須恵器、近世陶磁器			
三日市A遺跡 第8次調査	集落	古代・中世・近世	竪穴建物、掘立柱建物、竪穴状遺構、溝		土師器、須恵器、中世土師器、中世陶磁器、石製品			
三日市A遺跡 第19次調査	集落	古代	掘立柱建物、溝		土師器、須恵器、石製品			
要約	<p>古代の集落跡を確認し、竪穴建物と掘立柱建物などを検出している。そのうち2×7(8)間の掘立柱建物については石川郡内の駅家の可能性がある。</p> <p>中世については集落跡を確認し、掘立柱建物・竪穴状遺構などを検出した。</p> <p>近世については溝のみの検出で、自然河運、農業用水として利用されていたようである。</p>							

---

野々市市北西部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書4

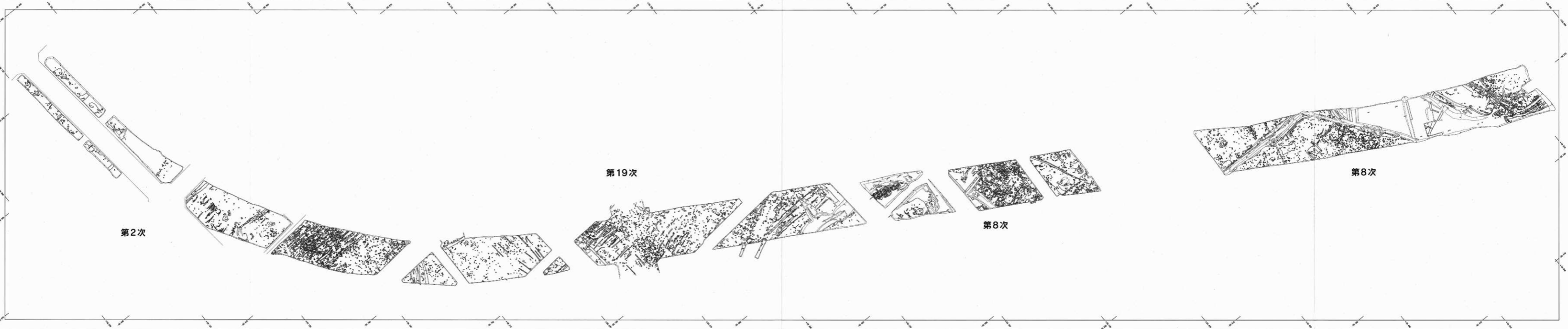
### 三日市A遺跡3

発行日	2012年3月30日
著作権所有	石川県野々市市三納一丁目1番地
発行者	野々市市教育委員会
印刷者	石川県野々市市矢作3丁目18 高桑美術印刷株式会社

---



三日市A遺跡遺構全体図(第2. 8. 19次)



第2次

第19次

第8次

第8次



